

農作物病虫害等防除指針
【 別 冊 】

(令和 6 年)

愛 媛 県

利用上の注意事項

- 本指針に掲載した農薬は、原則として令和5年12月6日現在で登録のある農薬を総括的にまとめたものであるが、農薬は登録内容の変更や、同じ成分であっても銘柄（製造メーカー）により登録内容が異なる場合等があるため、**農薬の使用にあたっては、農薬ラベルの表示事項（使用方法、注意事項等）を必ず確認し、使用すること。**（下記HP等を参照し、常に最新の情報を確認するとともに、変更があった場合は、必ず当該農薬のラベルを貼り替えてから、ラベルどおりに散布するよう指導すること。）
- 農薬の使用回数は、種子や苗における使用も回数にカウントされる（果樹等の永年性作物を除く）ため、種子や苗の購入元に農薬の使用履歴を確認すること。
- 本指針に記載してある農薬の使用回数は当該製剤で使用できる回数であるため、各成分の総使用回数が使用基準を超えないよう農薬ラベルでよく確認すること。
- 農薬取締法では、適用作物についてグループ化や分離登録等がされているため、「農薬登録における適用作物名について」（本冊P.16）を必ず確認すること。
- 薬剤防除法の欄に記載した時期は、あくまで目安として示したものであり、農薬ラベルに記載されている使用時期（収穫前日数等）を必ず遵守すること。
- 合成ピレスロイド剤、BT剤、IGR剤、その他水産動植物に影響を及ぼす農薬等を使用する場合、蚕や水産動植物への影響を考慮し、安全使用に努めること。

○農林水産省のホームページ「農薬登録情報提供システム」

最新の農薬登録情報（アドレス <https://pesticide.maff.go.jp/>）

○農林水産省ホームページ「農薬コーナー」

農薬行政に関する最新情報

（アドレス <https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html>）

○愛媛県農産園芸課ホームページ「愛媛県農業技術情報サービス」

「農薬の適正使用について」県内における農薬の適正使用への取り組み等

（アドレス <https://www.pref.ehime.jp/page/11438.html>）

○病害虫防除所ホームページ

病害虫発生予察情報等

（アドレス <https://www.pref.ehime.jp/site/byocyuboj/>）

目 次

※基本方針、薬剤系統略号一覧表、農薬適正使用・危害防止対策、果樹病虫害防除時期、
薬剤の注意事項一覧については、本冊を参照すること。

I 作物別病虫害防除指針

1 果 樹

(1) 果樹病虫害防除法	2
[1] いちじく	2
[2] すもも	4

2 野 菜

(1) 野菜の病虫害防除法	8
[1] メロン	8
[2] ミニトマト	13
[3] 甘長とうがらし	23
[4] ししとう	27
[5] カリフラワー	30
[6] 非結球レタス	33
[7] ごぼう	38
[8] やまのいも	39
[9] 実えんどう	42
[10] しょうが	45
[11] しそ	46
[12] チンゲンサイ	48
[13] オクラ	52
[14] しゅんぎく	54
[15] こまつな	56
[16] なばな	58
[17] みずな	60
[18] かぶ	62

1 果 樹

(1) 果樹病害虫防除法

[1] いちじく

いちじく

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	防除薬剤 一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人畜毒 (注)	注意事項
黒かび病	(発生の特徴) ○ 熟期に雨が多いと多発しやすい (発生のポイント) ○ 曇雨天が多いと多発しやすい ○ 葉の発病が多いと果実に多発	○ 発病果は早期に除去。 ○ 収穫は晴天日に行う。		1 M5	トップジンM水和剤 ダコニール1000	1:チオファネートメチル 1:TPN	1,500倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで	5回以内 2回以内	普 普	
疫病	(発生の特徴) ○ 曇雨天が多くと多発しやすい ○ 葉の発病が多いと果実に多発	○ 通風、採光、排水を良くする。 ○ 菌は土壌中に生存するので、マルチ等で水滴の跳ね上がりを防止。 ○ 病枝は切取り、病果、病葉を早期に除去。	6月 9月	11 21 21 40 M5	アミスター10フロアブル ランマンフロアブル ライメイフロアブル レーバスターフロアブル ダコニール1000	1:アゾキシストロビン 1:シアノアゾト 1:アズラアゾト 1:マンジプロバド 1:TPN	1,000倍 2,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普	
そうか病	(防除上のポイント) ○ 発病前散布に重点を置く。	○ 発病葉や発病果は早期に除去。 ○ 密植を避け、通風、採光をよくする。	5月 7月	M9 1 3 11	デランフロアブル トップジンM水和剤 トリフミン水和剤 アミスター10フロアブル	1:ジチアン 1:チオファネートメチル 1:トリフルソール 1:アゾキシストロビン	1,000倍 1,500倍 2,000倍 1,000倍	収穫75日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 5回以内 3回以内 3回以内	劇 普 普 普	○ かぶれ注意
株枯病	(耕種的防除法) ○ 発病株は適宜抜根。 ○ 発病株から穂木を採集しない。 ○ 発病園への苗木の定植時には、株元から地下部にかげ土壌pHを矯正する。※pH8以上で菌の増殖抑制。 ○ 発病園で苗木を育成しない。		5月 10月	1 1 3 M1	トップジンM水和剤 ベンレート水和剤 トリフミン水和剤 ICボルドー66D ※ICボルドー66Dは株元灌注。定植一年目の苗木には使用不可(葉害)	1:チオファネートメチル 1:ベミル 1:トリフルソール 1:塩基性硫酸銅	500倍 1,000倍 500倍 2倍	収穫前日まで 収穫30日前まで 収穫前日まで -	6回以内 5回以内 4回以内 -	普 普 普 普	○ 株元灌注、1~10L/株
さび病	(発生の特徴) ○ 樹勢が衰えた場合発病しやすい。 (防除上のポイント) ○ 早期発見し、薬剤は、発病根除去後に処理。 ○ 新植の際、前作物の発病の有無に注意。	○ 落葉は冬期に集め処分。	8月 9月	3 3 7 11 M5	アンベルフロアブル ラリー水和剤 フルーツセイバー アミスター10フロアブル ダコニール1000	1:ヘキサコナゾール 1:シクロプロキシム 1:ペンチオゼン 1:アゾキシストロビン 1:TPN	1,000倍 2,000倍 1,500倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 4回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普	○ 耐性菌注意
白紋羽病	(発生の特徴) ○ 樹勢が衰えた場合発病しやすい。 (防除上のポイント) ○ 早期発見し、薬剤は、発病根除去後に処理。 ○ 新植の際、前作物の発病の有無に注意。	(耕種的防除法) ○ 適正な樹勢を保つ。 ○ 未熟な粗大有機物を投入しない。		29	フロキサイドSC	1:フルアジラム	500倍	収穫50日前まで	1回	普	○ かぶれ注意(10日間入園禁止)
ネコブセンチュウ	○ 無寄生病を用いる。 ○ 野菜跡地等発生前歴のある圃場には植付しない。		生育期(5月、10月) 1B		ネマトリンエース粒剤	1:ホスチアゼン	20kg/10a	収穫60日前まで	1回	普	○ 樹冠下処理

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人水産 毒(注)	注意事項
カミキリムシ類			○6月～9月に成虫を捕殺。 ○虫糞が出ている場所を 目標に幼虫を捕殺。 ○新梢基部に産卵された 卵を叩き潰す(アワガミキ リ)。	6月中旬～8月中旬	4A		ダントツ水溶剤 園芸用キンチョールE ロビンフッド	1:クロチアジン 1:ベルトリソ 1:フェンプロパトリン	2,000倍 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 5回以内	普 普 普	○合ヒレ(本冊P.15)参照。 ○合ヒレ(本冊P.15)参照。	
キボシカミキリ				6月中旬～8月中旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍 収穫前日まで	3回以内	劇		
アザミウマ類		(発生の特徴) ○果口が開く時期に、果実 に侵入。	○園内部及び周辺を除草。 ○光反射マルチの使用。	6月中旬	3A		アデオン乳剤	1:ベルトリソ	2,000倍 収穫前日まで	2回以内	普	○合ヒレ(本冊P.15)参照。	
				6月中旬	3A		スカウトフロアブル	1:トラトリソ	2,000倍 収穫前日まで	3回以内	劇	○合ヒレ(本冊P.15)参照。	
				6月中旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍 収穫前日まで	3回以内	劇		
				7月	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍 収穫前日まで	2回以内	普		
				7月	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	5,000倍 収穫前日まで	1回	普		
				7月	5		デアイナWDG	1:スピネトラム	5,000倍 収穫前日まで	2回以内	普		
				7月	5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	5,000倍 収穫前日まで	2回以内	普		
				7月	30		グレーション乳剤	1:フルキサタタジド	2,000倍 収穫前日まで	2回以内	普		
ハダニ類			○園内部及び周辺を除草。	発生初期	10B		バロックフロアブル	1:エトキサゾール	2,000倍 収穫前日まで	1回	普		
				発生初期	20D		マイトローネフロアブル	1:ピフェネソート	1,000倍 収穫前日まで	1回	普		
				発生初期	25A		ダニサラバフロアブル	1:ジフルメトフェン	2,000倍 収穫前日まで	2回以内	普		
				発生初期	25A		スターマイトフロアブル	1:ジエピラフェン	2,000倍 収穫前日まで	1回	普		
				発生初期	25B		ダニロングフロアブル	1:ピフルアミド	2,000倍 収穫前日まで	1回	普		
モイチジク サビダニ		(防除上のポイント) ○発生初期の防除を徹底。		4月～6月(発生初期)	21A		サンマイト水和剤	1:ヒリタベン	1,500倍 収穫45日前まで	1回	劇	○刺激(眼)	
				4月～6月(発生初期)	21A		ピラニカ水和剤	1:ラアフェンピド	2,000倍 収穫7日前まで	1回	劇	○刺激(眼)	
				4月～6月(発生初期)	21A		ダニロングフロアブル	1:フェンピロキメト	2,000倍 収穫3日前まで	1回	普	○回数注意(アプロロエース)	
カワフ イゴ ラナ ムシ		(防除上のポイント) ○若齢幼虫の多発生時期 に防除。 ○多発時には、1回目散布 20日後に追加散布	○5月～8月に幹や枝で寄 生が多いときは、タワシな どで駆除。	6月中旬～7月上旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍 収穫前日まで	3回以内	劇		
				6月中旬～7月上旬	16		アプロードフロアブル	1:アプロロエシン	1,000倍 収穫14日前まで	2回以内	普		
				6月中旬～7月上旬	21A+16		アプロードエースフロアブル	1:アプロロエシン+2:アプロロエシン	1,000倍 収穫14日前まで	1回	普	○回数注意(アプロロエース)	
ヒトリ リジク モドキ		(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。 ○若齢幼虫が集団寄生し ている葉を切除。	○若齢幼虫が集団寄生し ている葉を切除。	6月	3A		アデオン乳剤	1:ベルトリソ	3,000倍 収穫前日まで	2回以内	普	○合ヒレ(本冊P.15)参照。	
				6月	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍 収穫前日まで	3回以内	劇		
				6月	11A		デルフィン顆粒水和剤	1:B(生菌)	1,000倍 発生初期但し収穫前日まで	—	—	○登録はケムシ類	
				6月	11A		ファイブスター顆粒水和剤	1:B(生菌)	1,000倍 発生初期但し収穫前日まで	—	—	○登録はケムシ類	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○散布ムラの少ないよう 丁寧に散布。	耕種的防除法	時期 コード 3月(萌芽前)	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	水産 人毒 (注)	注意事項	
												IRAC コード
ふくろみ病	○発病果の除去。	○越冬病斑を形成している枝は除去。 ○防風垣などで強風を防ぐ。	3月(萌芽前)	M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	葉芽発芽前まで	—	△		
				M3+1	ホーマイコート	1:チウラム2:チオファネートメチル	50~100倍	休眠期	1回	△		
				M3	チオノックフロアブル	1:チウラム	500倍	収穫14日前まで	3回以内	△		
黒斑病	(発生の特徴) ○サンタローザ・メスレーは発生が多いので注意。 (防除上のポイント) ○発園では、展葉期から10日おきに2~4回散布。	○越冬病斑を形成している枝は除去。 ○防風垣などで強風を防ぐ。	休眠期	M1	ICボルドー412	1:塩基性硫酸銅	30倍	—	—	△		
			4月中旬~(落弁後)5月中旬	M1	Zボルドー	1:塩基性硫酸銅	500倍	休眠期	—	—		△
			25	アグレプト水和剤	1:ストレプトマイシン 硫酸塩	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	△			
灰星病	(防除上のポイント) ○落弁後防除を徹底。 ○収穫20日前からの防除を重点防除期間とし、7日間隔で2回防除。	○発病した新梢は除去。 ○樹上及び地上の発病果は早めに園外へ除去。	収穫後	M1	ICボルドー412	1:塩基性硫酸銅	30倍	—	—	△	○登録は小粒核果類	
			3月(満開直後)~4月(落弁後)	2	スミレックス水和剤	1:プロジソン	1,500倍	収穫14日前まで	1回	△		
			3月(落弁後)	2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	△		
			3月(落弁後)	3	アンピルフロアブル	1:ヘキサコナゾール	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○		
			3月(落弁後)	3	オンリーワンフロアブル	1:グアコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	△		
			3月(落弁後)	3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	△		
			3月(落弁後)	3	インダーフロアブル	1:フェンコナゾール	5,000倍	収穫前日まで	4回以内	○		
			3月(落弁後)	7	バレード15フロアブル	1:ピラジフルホス	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	○		
			3月(落弁後)	7	フルーツセイバー	1:ベンチピラト	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	○		
			3月(落弁後)	11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	△		
			3月(落弁後)	11+7	ナリアWDG	1:ピラクロストロビン2:ホスカリド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	△※		
			3月(落弁後)	17	パワード顆粒水和剤	1:フェンヘキサト	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	○		
			3月(落弁後)	M7	ベルクート水和剤	1:ミタリクジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	△		
3月(落弁後)	M7	ベルクートフロアブル	1:ミタリクジンアルベシル酸塩	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	△					

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	水産 人毒 (注)	注意事項
カイガラシ類	(防除上のポイント) ○落弁後防除を徹底。 ○多発園では、第1回散布の2週間後に2回目を散布。	○多発生時にはタワシ等で、重なって寄生する虫を落とし薬剤散布。	5月	1B 4C 9B 16 23		マシン油乳剤(95%) ダーズバンDF トランスフロームフロアブル コルト顆粒水和剤 アプロード水和剤 モベントフロアブル	1:マシン油 1:アロピリホス 1:スルホキサフロ 1:ヒメジメキサゾ 1:アプロアゼン 1:スピロネキサト	3,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 劇 普 普 普 普 普	○被害(休)
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○発生初期に散布。		4月 5月 6月上旬	1A 4A 4A 4A 4C 9B 21A 23 29		オリオン水和剤40 モスピラン顆粒水和剤 ダントツ水和剤 アクタラ顆粒水和剤 トランスフロームフロアブル コルト顆粒水和剤 ハチハチフロアブル モベントフロアブル ウララDF	1:アタニカルブ 1:アセチアミド 1:クロチエジン 1:チアトキサム 1:スルホキサフロ 1:ヒメジメキサゾ 1:トルフェンブト 1:スピロネキサト 1:プロネキサト	1,000倍 4,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで	3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	劇 劇 普 普 普 普 普 普 普	○収穫前日まで ○被害(休)
シクイムシ類		○被害果は見つけ次第処分。	4月 8月	3A 3A 3A 4A 4A 4A 28 28 28		スカウトフロアブル テルスターフロアブル アグロスリン水和剤 モスピラン顆粒水和剤 アルバリン顆粒水和剤 スタークル顆粒水和剤 フェニックスフロアブル サムコルフフロアブル10 エクシレルSE	1:トラトリン 1:ヒフェントリン 1:シペルトリン 1:アセチアミド 1:ジノアフラン 1:ジノアフラン 1:フルベンジメイト 1:クロラントラニプロール 1:シアントラニプロール	2,000倍 3,000倍 1,000倍 4,000倍 2,000倍 4,000倍 2,500倍 5,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	劇 劇 普 普 普 普 普 普 普	○合ヒレ(本冊P.15)参照。 ○合ヒレ(本冊P.15)参照。 ○合ヒレ(本冊P.15)参照。
モモノゴマダラノメイガ			4月～8月	4A		バリアード顆粒水和剤	1:チクロプロイト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	
ケムシ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○作物や周辺植物上の卵塊や集団でいる若齢幼虫を処分。 ○冬季にまゆや蛹等を捕殺。	3月 9月	1A 15 18 28 28 28		オリオン水和剤40 カスケード乳剤 ロムダンフロアブル フェニックスフロアブル エクシレルSE ヨーバルフロアブル	1:アタニカルブ 1:フルフェイクソロン 1:アプロアゼン 1:フルベンジメイト 1:シアントラニプロール 1:アトニプロール	1,000倍 2,000倍 3,000倍 4,000倍 5,000倍 5,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内	劇 劇 普 普 普 普 普	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤					使用時期	濃度 (使用量)	使用回数	人毒 劇	水産 (注)	注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名						
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や圃地差も大きい。 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めに防除。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策(本冊P.151)参照		4月 下旬 8月	3A 3A 4A 4A 4A		アグロスリン水和剤 テルスターフロアブル アルバリン顆粒水溶液 スタークル顆粒水溶液 ダントゾ水溶液	1:シベルトリン 1:ピエントリン 1:シノテフラン 1:シノテフラン 1:クロチアエジン	1,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内	劇 劇 普 普 普	× × △ △ △	○葉害(4~5月品種による) ○葉害(4~5月品種による) ○合ヒ(本冊P.15)参照。 ○合ヒ(本冊P.15)参照。	
ハダニ類	(防除上のポイント) ○発生初期に防除。		7月 下旬 8月	12C 25A 25A 20D 23		オマイト水和剤 スターマイトフロアブル ダニサラバフロアブル マイコーネフロアブル ダニゲッターフロアブル ダニオーテフロアブル	1:BPFS 1:シエレラ7エン 1:シフルト7エン 1:ピフェネート 1:スピロボ7エン 1:アシナピル	750倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍	1回 1回 2回以内 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普	△※ △ ○ △ △ ○	○葉害(イネ) ○銅剤混用不可・銅剤近接散布(効力低下・1月以上空ける)	

2 野 菜

(1) 野菜病害虫防除法

[1] スロン

スロン

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	薬剤防除法					水産 人 毒 (注)	注意事項
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)		
えそ斑点病	病原ウイルスは、MNSVである。 スロン、マクワウリ、シロウリに発生する。 本病は下等菌類により土壌伝染する。	(耕種的防除法) ○ 床土は蒸気消毒機で125℃、30分処理する。 ○ 育苗期に発病したものは、定植しない。 ○ 発病株は早期抜き取り、処分する。							
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、CMV・WMVである。 ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。 ○ CMV・WMVが、重複感染すると激しい症状となる。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類の防除を徹底する。	(耕種的防除法) ○ 寒冷紗やシルババナーなどを使用し、アブラムシ類の飛来を防止する。 ○ 着果後の軽微な発病株は、最後に管理し、伝染を防止する。 ○ 発病株を早期抜き取り、処分する。							
黄化えそ病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、MYSVである。 ○ 虫媒(ミナモキイロアザミウマ)伝染するウイルス病である。 (防除上のポイント) ○ ミナモキイロアザミウマの防除を徹底する。 ○ 発病株を早期抜き取り、処分する。	(耕種的防除法) ○ 寒冷紗被覆で育苗する。 ○ シルババナー及びびシルババナーなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。 ○ 発病株を早期抜き取り、処分する。 ○ 圃場内外の除草を徹底する。							
斑点細菌病	(発生の特徴) ○ 病原菌は、多数のウリ科作物を侵すが、他科作物には病原性がない。 ○ ポリマルチや敷わらをす	○ 茎葉の過繁茂を避ける。 ○ 排水を良くし、高畝とする。 ○ ポリマルチや敷わらをす	24+M1	カスミンポルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普
苗立枯病	(発生の特徴) ○ リソトニア属菌によるものが多く、ピシウム属菌等によっても起こる。 (発生の特徴) ○ 地表面に落下した菌後で越冬する。 ○ 咲き終わった花弁から発病する。	○ 床土は、無病土を使用する。 ○ 育苗床の蒸し込みを避ける。 ○ 被害部を早期に除去する。 ○ 換気を図り、マルチを行う。	床土消毒 は種後～		土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照 苗木枯病の項(本冊P.307)参照				
菌核病	(発生の特徴) ○ 咲き終わった花弁から発病する。	○ 連作を避ける。 ○ 発病株の早期抜き取り、処分する。 ○ 地温を下げる。	1 12 M7+11	ベンレート水和剤 セイブアーフロアブル20 ファンペル顆粒水和剤	1:ベノゾル 1:フルジ'オキゾニル 1:ミノカタジ'アルベル酸塩 2:ピリ'エンカルブ	2,000～3,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 5回以内	普 普 普
黒点根腐病	(発生の特徴) ○ 定植後40日前後の、果実肥大がほぼ完了したころから、日中、萎れの有無に注意する。	○ 連作を避ける。 ○ 発病株の早期抜き取り、処分する。 ○ 地温を下げる。	7 17	パレード20フロアブル ピクシオDF	1:ピラ'フルシド 1:フェビ'ラサシ	2,000～4,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	普 普

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		薬剤防除法									
時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項					
うどんこ病	um	M5	ダコニール1000	1:TPN	700倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	○かぶれ注意					
		M7	ベルクルート水和剤	1:イミダクワシアルヘルシム酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○葉書等(注)(本冊P.299)					
うどんこ病	um	M9	ベルピカフロアブル	1:マンピリウム	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○葉書等(注)(本冊P.299)					
		M10	モレスタン水和剤	1:キキザリン系	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	10回以内	普	△						
		3	トリフミン水和剤	1:トリフミンゾール	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△						
		3	サブロール乳剤	1:リリネン	2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△						
		U6+3	ハンチョウTP顆粒水和剤	1:シフルフェチド2:リアルシノール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
		3+M3	テーク水和剤	1:シノナゾール2:マゼブ	600～800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△						
		3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		11	ストロビーフロアブル	1:カルキシムメチル	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		7	アフェットフロアブル	1:ペンチオチラト	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		7	ネクスターフロアブル	1:イピラザム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		7	パレード20フロアブル	1:ピラゾフルシド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		7	ケンジャフロアブル	1:イワエタシド	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		50	プロパティフロアブル	1:ピリオフェン	3,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		U13+9	シヨウチノスケフロアブル	1:フルチアニル2:マンピリウム	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
		7+M5	ベジセイバー	1:ペンチオチラト2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△						
		M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:イミダクワシアルヘルシム酸塩 2:ピリオフェン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
		うどんこ病	un	M10	バルミノ	1:キキザリン系	2,000倍	収穫3日前まで	10回以内	普	△				
銅剤及び混合剤(本冊P.317)、微生物農薬(参考資料P.210)参照															
M3	ジマンダイゼン水和剤			1:マゼブ	400～600倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△						
M3	ペンコゼフロアブル			1:マンゼブ	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△						
M5	ダコニール1000			1:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	○かぶれ注意					
M7	ベルクルート水和剤			1:イミダクワシアルヘルシム酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△						
3	スコア顆粒水和剤			1:ジフェコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
1	トッブジンM水和剤			1:チオアネートメチル	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
1	トッブジンMペースト			1:チオアネートメチル	原液	発病初期 但し、収穫21日前まで	1回	普	○	○発病部を削り塗布					
11+M5	アミスターオプティフロアブル			1:アジメクトリン2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△※	○葉書等(注)(本冊P.299)					
11	ストロビーフロアブル			1:カルキシムメチル	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉書等(注)(本冊P.299)					
7	アフェットフロアブル			1:ペンチオチラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
7+M5	ベジセイバー			1:ペンチオチラト2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
7	ネクスターフロアブル			1:イピラザム	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△						
7	パレード20フロアブル			1:ピラゾフルシド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
7	ケンジャフロアブル			1:イワエタシド	1500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
M7+11	ファンネル顆粒水和剤			1:イミダクワシアルヘルシム酸塩 2:ピリオフェン	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△						
M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:イミダクワシアルヘルシム酸塩 2:ピリオフェン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○								

薬剤防除法											
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	注意事項
べと病	<ul style="list-style-type: none"> ○ 病原の裏側にすす状のかびを発生させること、他の病害と区別可能である。 ○ 20～24℃が発病適温であり、多湿条件で発生が多くなる。また、肥料切れや草勢が弱った時に多発しやすい。 (防除上のポイント) ○ 発病前から予防散布を定期的に実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 肥料を十分に施し、肥切れしないようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 発病前 発病初期 	M3 M3 M5 P7 21 21 M3+4 27+40	M3 M3 M5 P7 21 21 M3+4 27+40	<ul style="list-style-type: none"> ジマンダイゼン水和剤 マンコzebプロアブガル ダコニール1000 アリエットイ水和剤 ランマンフロアブガル ライメイフロアブガル リドミルゴールMΖ ベストアイトー顆粒水和剤 	<ul style="list-style-type: none"> 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:TPN 1:ホセチル 1:シキキチニル2:マンゼブ 1:シキキチニル2:マンゼブ 1:マンゼブ 1:シキキチニル2:TPN 1:シキキチニル2:マンゼブ 1:シキキチニル2:塩基性塩化銅 1:マンゼブ 1:シキキチニル2:フェキキチン 	<ul style="list-style-type: none"> 400～600倍 500～800倍 500～600倍 700～1,000倍 800倍 1,000～2,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 2,500倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 5回以内 5回以内 5回以内 3回以内 4回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 5回以内 3回以内 3回以内 3回以内 	<ul style="list-style-type: none"> ○ かぶれ注意 ○ 葉害等(注)(本冊P.299)
チユウコウブセン	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) ○ 施設での発生が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質を十分施用する。 ○ 床土は水田土壌を使用する。 ○ 連作を避ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 発生前 発生期 	IB	27+11	<ul style="list-style-type: none"> ホライズントライフロアブガル 銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照 	<ul style="list-style-type: none"> 1:ホライズントライフロアブガル 	<ul style="list-style-type: none"> 2,500倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 3回以内 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 使用方法(注)(本冊P.300)、葉害等(注)(本冊P.299)
幼虫ハムシ	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) ○ 越冬成虫は、5月上旬～6月下旬に現れ、新成虫は7月下旬頃から羽化し、8月上旬が最盛期である。 ○ 幼虫による被害は7月上旬から認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼植物期間中は成虫飛来回避のため被覆する。 ○ 成虫の産卵防止のために株元に川砂を敷く。 	<ul style="list-style-type: none"> 初成虫発生 	IB		<ul style="list-style-type: none"> ガードホープ液剤 ダイアジン粒剤3 	<ul style="list-style-type: none"> 1:ホライゼン 	<ul style="list-style-type: none"> 4,000倍 6～9kg/10a 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫28日前まで 植付時 	<ul style="list-style-type: none"> 1回 1回 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌混和葉害等(注)(本冊P.299) ○ 登録は、マリハムシ
コナジラミ類	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 ○ 上位葉には、成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。 ○ 施設では、冬期も発生し、加害する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分散布する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。 ○ ハウス栽培では、天日ネットとして近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入抑制に有効である(ミツバチを利用する場合は不可)。 	<ul style="list-style-type: none"> 発生前 	<ul style="list-style-type: none"> 4A 23 28 4A 4A 4A 		<ul style="list-style-type: none"> ダントツ粒剤 モベントフロアブガル ベリマークSC アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ダントツ粒剤 	<ul style="list-style-type: none"> 1:クロチアニジン 1:スピロテトラン 1:シアントリアプロール 1:ジノダフラン 1:ジノダフラン 1:クロチアニジン 	<ul style="list-style-type: none"> 1～2g/株 500倍 25ml/400株 1～2g/株 1～2g/株 1～2g/株 	<ul style="list-style-type: none"> 育苗期後半 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日 定植時 定植時 定植時 	<ul style="list-style-type: none"> 1回 1回 1回 1回 1回 1回 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 株元処理 ○ 株元灌水(25～50ml/株) ○ 400株当り10～200(1株当り25～50ml)混用(注)(本冊P.300) ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	薬剤防除法				本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項				
							一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数								
コナジラミ類	タバココナジラミ類(シルバリー・ブロンズジラミを含む) (発生の特徴) ○ワタアブラムシが主体である。 ○葉裏及び生長点に寄生が多いので、この部分に丁寧に散布する。 ○ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部地域で認められている。		発生初期	21A+16		アプロードエースフロアブル	1:フェニトキサメト2:アプロフェジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照					
						ダントツ水溶剤	1:クチアミン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
アブラムシ類	タバココナジラミ類(シルバリー・ブロンズジラミを含む) (発生の特徴) ○ワタアブラムシが主体である。 ○葉裏及び生長点に寄生が多いので、この部分に丁寧に散布する。 ○ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部地域で認められている。		発生前	4A 23 28 28 4A		バリアート顆粒水和剤	1:チアクロプリト	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○株元散布					
						アルバリン顆粒水溶剤	1:チアクロプリト	500倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	○	○株元灌注(25~50ml/株)					
						スタークル顆粒水溶剤	1:シトラピロリト	25ml/400株	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○400株当たり10~200(1株当たり25~50ml)混用(注)(本冊P.300)					
						アブアーム乳剤	1:シトラピロリト	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○灌注(25ml/株)					
						モベントフロアブル	1:シトラピロリト	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴又は株元土壌混和					
						コルト顆粒水和剤	1:シトラピロリト											
						ダイアナSC	1:シトラピロリト											
						ダブルシユーターSE	1:シトラピロリト											
						グレーシア乳剤	1:フルキサミド											
						アグリメック	1:フルキサミド											
ウリノメイカ	(被害虫の名称) ○標準和名(ウタヘリクノメイカ)。		発生初期	5 5 6+15 28 28 30		アドマイヤー水和剤	1:シトラピロリト	2,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については着果後)	3回以内	劇	△						
						モスビラン顆粒水溶剤	1:アセチミプロト	8,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△						
						バリアート顆粒水和剤	1:チアクロプリト	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△						
						トランスフォーラムフロアブル	1:フルキサミド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○						
						チェス顆粒水和剤	1:ピネロジン	5,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	○						
						コルト顆粒水和剤	1:フルキサミド	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
						ウアラDF	1:フルキサミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○						
						モベントフロアブル	1:シトラピロリト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○						
						ヨーバルフロアブル	1:シトラピロリト	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
						クムバノ(本冊P.316)参照	1:シトラピロリト											
ウリノメイカ	(被害虫の名称) ○ハウス栽培では、開口部に防虫ネット等の設置を。		発生初期	5 5 6+15 28 28 30		ダイアナSC	1:シトラピロリト	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
						ダブルシユーターSE	1:シトラピロリト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
						アブアームエッセ顆粒水和剤	1:エマクサン安息香酸塩2:フルキサミド	1000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※						
						フェニックス顆粒水和剤	1:フルキサミド	2000~4000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
						ヨーバルフロアブル	1:シトラピロリト	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
グレーシア乳剤	1:フルキサミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△												

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ハモグリバエ類	<ul style="list-style-type: none"> 発生の特徴 発生の特徴は、トマトハモグリバエである。 成虫の侵入を防止するため、施設の開口部に防虫ネット等(1mm目以下(0.6mm目が望ましい))を設置する。 被害を受けた収穫残渣は、発生源となるので、適切に処分する。 	<ul style="list-style-type: none"> 苗からの持ち込みを防ぐ。 成虫の侵入を防止するため、施設の開口部に防虫ネット等(1mm目以下(0.6mm目が望ましい))を設置する。 被害を受けた収穫残渣は、発生源となるので、適切に処分する。 	発生前	4A 4A 28 4A 4A 4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ヨーバルフロアブル アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アクタラ粒剤5	1:シノチフラン 1:シノチフラン 1:ネトラニリアロール 1:シノチフラン 1:シノチフラン 1:チアトキサム	2g/株 2g/株 200倍 2g/株 2g/株 2g/株	育苗期 育苗期 育苗期後半～定植当日 定植時 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ ×	<ul style="list-style-type: none"> 株元散布 株元散布 灌注(25ml/株) 植穴土壌混和 植穴土壌混和 植穴処理
トマトハモグリバエ			発生初期	5 5 5 6 6		スピノサド ダブルシユーターSE デイナナSC アファーム乳剤 コロマイト乳剤	1:スピノサド 1:脂脂肪酸リセリン(虫)2:スピノサド 1:スピノサド 1:エマメチン安息香酸塩 1:シルベ、メチン	5,000倍 1,000倍 2,500～5,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普	△ △ △ △※ △※	<ul style="list-style-type: none"> 単用散布とし、高温時には使用しない。
メダニ類	<ul style="list-style-type: none"> メダニ類は、メダニ類(防除のポイント) 高密度になると防除効果が上がりにくいため、初期防除に努める。 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニの離脱、移動も考慮し適切に実施する。 高密度になり、クモの巣状になった寄生葉は、早期に摘除し、適切に処分する。 	<ul style="list-style-type: none"> メダニ類は、メダニ類(防除のポイント) 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニの離脱、移動も考慮し適切に実施する。 高密度になり、クモの巣状になった寄生葉は、早期に摘除し、適切に処分する。 	発生初期	6 6 6 25A 20D 25A 20B 25B+21A 25B 30		コロマイト水和剤 コロマイト乳剤 アグリメック スターマイトフロアブル マイトコーネフロアブル ダニサラバフロアブル カネマイトフロアブル デュアルサイド水和剤 ダブルフェースフロアブル ダニソングフロアブル グレーシア乳剤 くん煙剤(P.316)参照	1:シルベ、メチン 1:シルベ、メチン 1:アハメチン 1:シエビアアエン 1:ピフェナゼト 1:シアルメアエン 1:アセキシル 1:アセキシル/エチル2:ポリオキシン複合体 1:ピフルプロシト2:アセピロキシメト 1:ピフルプロシト 1:フルキサメチン	2,000倍 1,000倍 500 2,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000～1,500倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 3回以内 1回 1回 2回以内 1回 5回以内 1回 1回 2回以内	普 普 劇 普 普 普 普 普 普 普	△※ △※ △ △ △ △ △ △ △ △	<ul style="list-style-type: none"> 単用散布とし、高温時には使用しない。 単用散布とし、高温時には使用しない。
メダニ類			発生初期	15 17 4A		カスケード乳剤 トリガード液剤 アクタラ顆粒水溶液	1:フルエタクロン 1:シロメチン 1:チアトキサム	2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ △	<ul style="list-style-type: none"> IGR剤(注)(本冊P.15)参照 IGR剤(注)(本冊P.15)参照
メダニ類			発生初期	6 6 6 25A 20D 25A 20B 25B+21A 25B 30		コロマイト水和剤 コロマイト乳剤 アグリメック スターマイトフロアブル マイトコーネフロアブル ダニサラバフロアブル カネマイトフロアブル デュアルサイド水和剤 ダブルフェースフロアブル ダニソングフロアブル グレーシア乳剤 くん煙剤(P.316)参照	1:シルベ、メチン 1:シルベ、メチン 1:アハメチン 1:シエビアアエン 1:ピフェナゼト 1:シアルメアエン 1:アセキシル 1:アセキシル/エチル2:ポリオキシン複合体 1:ピフルプロシト2:アセピロキシメト 1:ピフルプロシト 1:フルキサメチン	2,000倍 1,000倍 500 2,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000～1,500倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 3回以内 1回 1回 2回以内 1回 5回以内 1回 1回 2回以内	普 普 劇 普 普 普 普 普 普 普	△※ △※ △ △ △ △ △ △ △ △	<ul style="list-style-type: none"> 単用散布とし、高温時には使用しない。 単用散布とし、高温時には使用しない。
メダニ類			発生初期	10B		ハロクフロアブル	1:エトキサゾール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	<ul style="list-style-type: none"> 単用散布とし、高温時には使用しない。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法					注意事項		
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名		濃度(使用量)	使用時期
ウイルス病	<p>TomMVによるウイルス病 (発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌伝染、種子伝染するウイルス病である。 ○ 強い汁液伝染力を持つため、発病株を管理した手・はさみ等を通しての感染も高率でおこる。 ○ クロロピクリンは効果がない。 <p>CMVによるウイルス病 (発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。 ○ 露地トマトに発生が多い。 ○ 防除上のポイント) 	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 本病を対象とした種子消毒済みの種子を利用する。 ○ 床土は、無病土を使用する。 ○ 連作する場合は、抵抗性品種を利用する。 ○ 発病株は早期に抜き取る。 ○ 支柱等の資材を更新する。 <p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 育苗期間中は寒冷紗で被覆する。 ○ シルバーポリやシルバーテープなどを使用し、アブラムシ類の飛来を防止する。 ○ 圃場周辺を除草する。 								
黄化葉巻病	<p>TYLCVによるウイルス病 (発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 虫媒(タバコナジラミ、バイタイプB、及びQ)伝染するウイルス病である。 ○ タバコナジラミ、バイタイプB及びQの防除を徹底する。 ○ 本県はイスラエル系とマイルド系が確認されている。 	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ アブラムシ類の飛来防止と防除を行う。 				アブラムシ類の項(P.17)参照				
縮病化萎	<p>TbLCIVによるウイルス病 (発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 虫媒(タバコナジラミ)伝染するウイルス病である。 	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 防虫ネット(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))等で、育苗圃や本圃への媒介虫の侵入を防止する。 ○ 施設内外の除草に努め、近くに媒介虫が寄生しやすい植物を置かない。 ○ 発病株は、早急に除去し、適切に処分する。 ○ ウイルスの系統に応じた耐病性品種を利用する。 				トマト黄化葉巻病の項(本冊P.311)参照				
青枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 梅雨明けから夏季にかけての高温期に発生し、連作した圃場で多発する。 ○ 青枯病菌は、過湿な圃場状態を好み、排水不良、過灌水や冠水によって爆發的に発生する。 ○ 外観上健全と見えた株が、急激に萎れ、短期間で枯死する。 	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 黄化葉巻病の防除法の項参照(上記)。 <p>床土、本圃の土壌消毒</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 床土は無病土を使用する。 ○ 5年以上の輪作を行う。 ○ 連作を避け、発病圃場は、3年以上水田化を行う。 ○ 発病株は早期に除去する。 ○ 移植後の植え傷みや、管理作業時に根に傷をつけないようにする。 ○ 排水を図る。 ○ 敷きわらやマルチ等により地温の上昇を抑制させる。 ○ 石灰を多量に施用する(200kg/10a)。 ○ 抵抗性台木を利用する。 ○ ハサミ等作業器具の消毒、および手の洗浄を行いながら作業する。 				コナジラミ類、タバコナジラミの項(P.18、19)参照 土壌消毒害虫防除法の項(本冊P.301)参照				
斑点細菌病	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 育苗期から予防する。 ○ 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。 	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 連作を避ける。 ○ 窒素肥料の多用を避ける。 ○ 被害茎葉は、圃場外へ持ち出す。 ○ 排水・換気等を図り、多湿を避ける。 ○ ポリマルチを被覆し、土壌等の跳ね上がり防止する。 				発病前～ 銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照				

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産 人 毒 (注)	注意事項
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> 軟腐病菌は灌水や、降雨による土壌のはね上がりで伝染する。 茎は正しい部分が腐敗消失し、やがて枯死する。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。 芽かき直後に薬剤散布を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 床土は無病土を使用する。 連作を避ける。 傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。 窒素肥料の多用を避ける。 ポリマルチを被覆し、土壌等の跳ね上がりを防ぐ。 	発病前～			銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照 微生物農薬(参考資料P.20)参照						
病立枯	<ul style="list-style-type: none"> 幼苗の段階で罹病すると、倒伏することがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 床土は無病土を使用する。 	床土消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照						
白絹病	<ul style="list-style-type: none"> 高温多湿条件下で多発する。 前作作物の残渣や未熟堆肥のすき込みは、発病を助長する。 	<ul style="list-style-type: none"> 連作を避け、床土は無病土を使用する。 被害株や病原菌の付着した畝わら等は、菌核を落とさないように、圃場外へ持ち出す。 被害株周辺の表土は、菌核が多いので土中深く埋め込む。 3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換を実施する。 植え付け前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正する。 無病苗を定植する。 	発病後～			苗立枯病の項(本冊P.307)参照						
萎凋病	<ul style="list-style-type: none"> 比較的高温期に発生する。 葉が黄化し、茎の維管束の褐変は、根から発病した葉の位置付近まで比較的広範囲に認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> 床土は無病土を使用する。 5年以上の輪作を行う。 排水を良くする。 石灰を多量施用する(200kg/10a以上)。 有機物を施用する。 敷きわらを行う等、地温の上昇を抑制する。 抵抗性台木に接木する。 	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照						
根腐萎凋病	<ul style="list-style-type: none"> 夏秋栽培でも梅雨時期に発病することがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 床土は無病土を使用する。 5年以上の輪作を行う。 排水を良くする。 石灰を多量施用する(200kg/10a以上)。 有機物を施用する。 敷きわらを行う等、地温の上昇を抑制する。 抵抗性台木に接木する。 	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産 人毒 (注)	注意事項		
													床土、本圃 の土壌消毒	
疫病	<ul style="list-style-type: none"> ハウス栽培では、低温多湿時に、露地栽培では梅雨時期に発病が多い。 梅雨入り後や曇雨天(20℃前後)の低温で多湿条件が続きと発生しやすいです。莖葉過多・多湿条件は、発病を著しく助長する。 (防除上のポイント) <ul style="list-style-type: none"> 育苗で幼苗に発生することがあるので、苗床での薬剤散布を十分に行う。 防除は発病前から予防散布を定期的に行う(特に発生しやすい時期は、雨の合間を利用して薬剤散布を行う)。 初発を確認したら、散布間隔を短縮し、集中的に薬剤散布する。 	<ul style="list-style-type: none"> 露地栽培ではマルチをし、雨で土粒が跳ね上がらないうようにする。可能であれば、雨よけ栽培にする。 排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ハウス栽培では夜間、茎葉に水滴がつかないような管理に努める。 被害茎葉は第二次伝染源となるので除去する。 被害残渣は、次作の感染源になるので、栽培後は圃場に残さない。 	床土、本圃の土壌消毒			<ul style="list-style-type: none"> ベンコゼフロアアブル ダコニール1000 ランマンフロアアブル ホライズントライフロアアブル フェステイバルC水和剤 ベトファイター顆粒水和剤 ダイナモ顆粒水和剤 ライメイフロアアブル ザンプロDMフロアアブル レーバスフロアアブル プロボーズ顆粒水和剤 ゾーベックエテクタSE 	<ul style="list-style-type: none"> 1:マンゼブ 1:TPN 1:シブアブアド 1:シモキサニル2:フアモキサトシ 1:シトモル2:塩基性塩化銅 1:シモキサニル2:ベンチアハカリアルブイアブル 1:アミスプロロム2:シモキサニル 1:アミスプロロム 1:アトドトジン2:ジトモル7 1:マンジブプロバシト 1:ベンチアハカリアルブイアブル 2:TPN 1:アミスプロロム2:オキサチアブプロリン 	<ul style="list-style-type: none"> 1,000倍 1,000倍 1,000~2,000倍 1,500~2,500倍 600~800倍 2,000倍 2,000~5,000倍 2,000~4,000倍 1,500倍 2,000倍 1,500倍 4,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 2回以内 2回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 	<ul style="list-style-type: none"> 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 	<ul style="list-style-type: none"> △ × ○ △※ △ ○ △※ ○ ○ ○ 		
葉かび病	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) <ul style="list-style-type: none"> 施設での発病が激しい。 高温期に病勢は衰える。 (防除上のポイント) <ul style="list-style-type: none"> 感染から発病まで2週間以上かかることもあり、発病後からの防除では効果が上がりにくい。感染初期から防除を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 抵抗性品種を栽培する。(抵抗性品種を侵す葉かび病菌の新レーズが確認されており、選択には注意が必要) 密植を避け、草勢を落さないように管理する。 ハウスの排水を良くし、換気に努める。 過度の灌水は避ける。 多発した葉は、伝染源となるので除去する。 資材を消毒又は更新する。 	<ul style="list-style-type: none"> 抵抗性品種を栽培する。(抵抗性品種を侵す葉かび病菌の新レーズが確認されており、選択には注意が必要) 密植を避け、草勢を落さないように管理する。 ハウスの排水を良くし、換気に努める。 過度の灌水は避ける。 多発した葉は、伝染源となるので除去する。 資材を消毒又は更新する。 	発病前、発病初期			<ul style="list-style-type: none"> ベルグート水和剤 ベルグートフロアアブル ダコニール1000 ゲッター水和剤 ニマイバー水和剤 トリフミン水和剤 フリー乳剤 フリー水和剤 アフェットフロアアブル ネクスターフロアアブル パレード20フロアアブル ケンジャフロアアブル シグナムWDG アミスターオプテフロアアブル ベジセイバー くん煙剤(本冊P.316)参照 	<ul style="list-style-type: none"> 1:ミルカタジンアルヘルシル酸塩 1:ミルカタジンアルヘルシル酸塩 1:TPN 1:ジエトエンカルブ2:オチアネートチル 1:ジエトエンカルブ2:ベミル 1:トリフミン 1:シロブタニル 1:シロブタニル 1:ベンチオチト 1:イビラザム 1:ピラゾル 1:イフエタシ 1:ピラロトロピン2:ボクストリド 1:アキシストロピン2:TPN 1:ベンチオチト2:TPN 	<ul style="list-style-type: none"> 6,000倍 4,000倍 1,000倍 1,500倍 1,000倍 3,000~5,000倍 2,500~5,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000~4,000倍 1,500倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 	<ul style="list-style-type: none"> 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 	<ul style="list-style-type: none"> △ △ × ○ ○ △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 	<ul style="list-style-type: none"> ○葉害等(注)(本冊P.299) ○葉害等(注)(本冊P.299)
すすかび病	<ul style="list-style-type: none"> (病害虫の特徴) <ul style="list-style-type: none"> 類似する葉かび病との識別には、検鏡による病原菌の観察が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 密植を避け、排水を良くし、多湿を防ぐ。 発病葉、被害残渣は圃場外に持ち出し、適切に処分する。 	<ul style="list-style-type: none"> 密植を避け、排水を良くし、多湿を防ぐ。 発病葉、被害残渣は圃場外に持ち出し、適切に処分する。 	発病前、発病初期		<ul style="list-style-type: none"> ダコニール1000 ベルグートフロアアブル ベンコゼフロアアブル トリフミン水和剤 トリフミン乳剤 ファンジスタ顆粒水和剤 アミスターオプテフロアアブル ベジセイバー ニマイバー水和剤 	<ul style="list-style-type: none"> 1:TPN 1:ミルカタジンアルヘルシル酸塩 1:マンゼブ 1:トリフミン 1:トリフミン 1:ファンジスタ 1:アキシストロピン2:TPN 1:ベンチオチト2:TPN 1:ジエトエンカルブ2:ベミル 	<ul style="list-style-type: none"> 1,000倍 4,000倍 1,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000~3,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 2回以内 2回以内 2回以内 5回以内 5回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 	<ul style="list-style-type: none"> 普 普 普 普 普 普 普 普 普 	<ul style="list-style-type: none"> × △ △ △ △ △ △※ △ △ 	<ul style="list-style-type: none"> ○葉害等(注)(本冊P.299) 	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	<ul style="list-style-type: none"> 発生の特徴 (発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)多湿条件下で発生する。 ○ 予防散布(発病後は効果が上がりにくい)を行う。 ○ 発病後は7～10日間隔で防除する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 花卉・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避ける。 	発病前 発病初期		2 M7 M7 M7 10+1 10+1 7 7 7 7 7+M5 11+M5	<ul style="list-style-type: none"> ロプラール水和剤 ベルクートフロアブル セイビアフロアブル20 ゲッター水和剤 ニマイバー水和剤 カンタストライフロアブル アフェットフロアブル パレード20フロアブル ケンジャフロアブル ネクスターフロアブル ベジセイバー アミスターオーブフロアブル くん煙剤(本冊P.316)参照 微生物農薬(参考資料P.20)参照 	<ul style="list-style-type: none"> 1:イブゾロン 1:ボクタシオンヘルシ酸塩 1:ボクタシオンヘルシ酸塩 1:フルジオキソニル 1:ジエトエンカルブ2:チオアフラネート 1:シエトエンカルブ2:β-ニミル 1:ボスタト 1:ペンチオザト 1:ピラゾルズ 1:イフエタ 1:イビラザム 1:ペンチオザト2:TPN 1:アゾキシストロビン2:TPN 	<ul style="list-style-type: none"> 1,000～1,500倍 6,000倍 4,000倍 1,000～1,500倍 1,500倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 	<ul style="list-style-type: none"> 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 葉害等(注)(本冊P.299) 	
うどんこ病	<ul style="list-style-type: none"> 発生の特徴 (発生の特徴) ○ ハウス栽培で発生が多い。 ○ 乾燥条件下で多発する。 ○ 発病適温は、20～25℃である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 通風を良くする。 ○ 密植を避ける。 ○ 窒素過多を避ける。 ○ 樹勢低下を避ける。 ○ 被害残渣を除去する。 	発病前 発病初期		7 7 7 7 7+M5 M7 NC NC U6+3 7	<ul style="list-style-type: none"> アフェットフロアブル ネクスターフロアブル パレード20フロアブル ケンジャフロアブル ベジセイバー ベルクートフロアブル カリグリーン ハニモメイ水溶剤 バンチョTP顆粒水和剤 ベミデタッチ 銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照 微生物農薬(参考資料P.20)参照 	<ul style="list-style-type: none"> 1:ペンチオザト 1:イビラザム 1:ピラゾルズ 1:イフエタ 1:ペンチオザト2:TPN 1:ボクタシオンヘルシ酸塩 1:炭酸水素カリウム 1:炭酸水素ナトリウム 1:シフルエタニト2:トリフルシニル 1:グリセリン脂肪酸エステル 	<ul style="list-style-type: none"> 2,000～4,000倍 1,000倍 2,000～4,000倍 1,500倍 1,000倍 4,000倍 800～1,000倍 800～1,000倍 2,000倍 500倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 — — 2回以内 — 	<ul style="list-style-type: none"> 普 普 普 普 普 普 普 普 普 普 		
輪紋病	<ul style="list-style-type: none"> 発生の特徴 (発生の特徴) ○ 窒素過多・肥切れさせない、よう適正な肥培管理を行う。 ○ ハウス栽培では、換気を図り、多湿を避ける。 		発病前 発病初期		M3 2 M5 7	<ul style="list-style-type: none"> ベニコゼフロアブル ロプラール水和剤 ダコニール1000 ネクスターフロアブル 銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照 	<ul style="list-style-type: none"> 1:マンゼブ 1:イブゾロン 1:TPN 1:イビラザム 	<ul style="list-style-type: none"> 1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 	<ul style="list-style-type: none"> 普 普 普 普 		
斑点病	<ul style="list-style-type: none"> 発生の特徴 (発生の特徴) ○ 品種「千果」「百花繻乱」は、本病に強く発病が多い。 		発病前 発病初期		2 M5 M7 7+M5 11	<ul style="list-style-type: none"> ロプラール水和剤 ダコニール1000 ベルクートフロアブル ベジセイバー スクレアフロアブル 銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照 	<ul style="list-style-type: none"> 1:イブゾロン 1:TPN 1:ボクタシオンヘルシ酸塩 1:ペンチオザト2:TPN 1:マンデスストロビン 	<ul style="list-style-type: none"> 1,000倍 1,000倍 4,000倍 1,000倍 2,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 	<ul style="list-style-type: none"> 普 普 普 普 		
菌核病	<ul style="list-style-type: none"> 発生の特徴 (発生の特徴) ○ ハウス栽培では無加温栽培で発生が多い。 ○ 発病は低温(18～20℃)・多湿条件下で見られる。 ○ 発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。 	発病前 発病初期		10+1 10+1 7 7 7 7 11	<ul style="list-style-type: none"> ゲッター水和剤 ニマイバー水和剤 カンタストライフロアブル アフェットフロアブル パレード20フロアブル ネクスターフロアブル スクレアフロアブル 銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照 	<ul style="list-style-type: none"> 1:ジエトエンカルブ2:チオアフラネート 1:シエトエンカルブ2:β-ニミル 1:ボスタト 1:ペンチオザト 1:ピラゾルズ 1:イビラザム 1:マンデスストロビン 	<ul style="list-style-type: none"> 1,500倍 1,000倍 1,000～1,500倍 2,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍 2,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 	<ul style="list-style-type: none"> 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 	<ul style="list-style-type: none"> 普 普 普 普 普 普 普 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 葉害等(注)(本冊P.299) 	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水害 (注)	注意事項		
														土壌消毒	
ネコブセンチュウ	○ 有機質資材を十分施用する。 ○ 床土は、水田土壌を使用する。 ○ 連作を避ける。	○ 無寄生素を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺の除草に努める。 ○ シルバーホリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下で侵入量を減らす効果)。	発生の初期	1B		ガードホープ液剤	1:ホチアセート	4,000倍 2g/m ² 灌水	収穫前日まで	1回	劇	○	○ 葉害等(注)(本冊P.299)		
アブラムシ類			発生前	4A		ベスタガード粒剤	1:ニテンピラム	5g/培土0.1	は種時又は鉢上げ時	1回	1回	普	△	○ 育苗培土混和	
					28		ベリマークSC	1:シアントニリアロー	25ml/400株	育苗期後半～定植当日	1回	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～200(1株当り25～50ml)、混用(注)(本冊P.300) ○ 株元処理
					4A+28		アペイル粒剤	1:アセタミプリド・2:シアントニリアロー	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	1回	普	○	○ 25ml/株灌水
			28		ヨーバルフロアブル	1:チトニリアロー	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	1回	普	△	○ 株元処理		
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	1g/株	育苗期	1回	1回	普	△	○ 株元処理		
			4A		アドマイヤー1粒剤	1:ミダクロアプリド	1～2g/株	定植時	1回	1回	普	△	○ 植穴土壌混和		
			4A		モスビラン粒剤	1:アセタミプリド	1g/株	定植時	1回	1回	普	△	○ 植穴土壌混和		
			4A		アレルバリン粒剤	1:シノチアラン	1g/株	定植時	1回	1回	普	△	○ 植穴土壌混和		
			4A		スタークル粒剤	1:シノチアラン	1g/株	定植時	1回	1回	普	△	○ 植穴土壌混和		
			4A		ダントツ粒剤	1:ニテンピラム	1～2g/株	定植時	1回	1回	普	△	○ 植穴土壌混和		
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	1～2g/株	定植時	1回	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和		
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	1～2g/株	定植後	3回以内	3回以内	普	△	○ 植穴処理土壌混和 ○ 株元散布		
			4A		アレルバリン粒剤	1:シノチアラン	1g/株	生育期但し、収穫前日まで	2回以内	2回以内	普	△	○ 株元散布		
			4A		スタークル粒剤	1:シノチアラン	1g/株	生育期但し、収穫前日まで	2回以内	2回以内	普	△	○ 株元散布		
			4A		アドマイヤーフロアブル	1:ミダクロアプリド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	2回以内	劇	△			
			4A		モスビラン顆粒水溶液	1:アセタミプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	3回以内	劇	△			
			4A		ダントツ水溶液	1:クロチアニン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	3回以内	劇	△			
			4A		バリアート顆粒水和剤	1:チクロアプリド	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	3回以内	劇	△			
			9B		チェス顆粒水和剤	1:ピネロニン	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	3回以内	普	○			
			9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリアルキナリン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	3回以内	普	○			
			29		ウラアDF	1:フロニカスト	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	3回以内	普	○			
			28		ベネビアOD	1:シアントニリアロー	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.299)		
			4C		トランスマフォーマフロアブル 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)	1:ズルホキサフル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	2回以内	普	○			

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○ トマト黄化葉巻病の項(本冊P.311)参照		耕種的防除法		薬剤防除法									
時期	IRACコード	FRACコード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項					
発生前	4A		アルバリン粒剤	1:シノチアラン	1~2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布					
	4A		スタークル粒剤	1:シノチアラン	1~2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布					
発生前	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	1g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元処理					
	4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	1g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布					
4A	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ピダククロアクト	0.5~1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布					
	4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	5g/培土0	は種時又は鉢上げ時	1回	普	△	○ 育苗培土混和					
4A	4A		アルバリン顆粒水溶液	1:シノチアラン	100倍	鉢上時又は定植時	1回	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.299)					
	4A		スタークル顆粒水溶液	1:シノチアラン	100倍	鉢上時又は定植時	1回	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.299)					
28			ベリマークSC	1:シアントラニリアロー	25ml/400株	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10~200(株当り25~50ml)、混用(注)(本冊P.300)					
4A+28			アベイル粒剤	1:アセタミプリド2:シアントラニリアロー	2g/株	育苗期後半~定植当日	1回	普	○	○ 株元処理					
28			ヨーバルフロアブル	1:チトラニリアロー	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 25ml/株灌水					
4A			アドマイヤー1粒剤	1:ピダククロアクト	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和					
4A			モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和					
4A			ダントツ粒剤	1:クロチアニン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和					
4A			ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和					
4A			アルバリン粒剤	1:シノチアラン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和					
4A			スタークル粒剤	1:シノチアラン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和					
4A			アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	1g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理					
7C			ラノーテープ	1:ピリアキシンフェン	10~50㎡/10a	栽培期間中	1回	普	○	○ ラノーテープの注意事項(参考資料P.28)					
発生前	4A		アルバリン粒剤	1:シノチアラン	1g/株	生育期日	2回以内	普	△	○ 株元散布					
	4A		スタークル粒剤	1:シノチアラン	1g/株	生育期日、収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 株元散布					
9B	29		チェス顆粒水和剤	1:ピホロン	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ タバココナジラミには効果低い。					
	15		ウラアDF	1:フロンカスト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)					
15	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサズロン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)					
	15		ノーモルト乳剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)					
15	15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)					
	15		アタブロン乳剤	1:クロフルアズロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15) 登録はタバココナジラミ					
4A	4A		モスピラン顆粒水溶液	1:アセタミプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△						
	4A		バリアート顆粒水和剤	1:チアトキサム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△						
4A	4A		アルバリン顆粒水溶液	1:シノチアラン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
	4A		スタークル顆粒水溶液	1:シノチアラン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
6	6		コロマイト乳剤	1:シルベクチン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	△※					
	6		アニキ乳剤	1:ピヒカチン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	△※					
5	5		ディアナSC	1:スピネラム	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.299)					
	5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
9B			コルト顆粒水和剤 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)	1:ピリアルキタン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	FRACコード				使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産(注)	注意事項
			IRACコード	時期	FRACコード	時期							
コナジラミ類			4A		アトマイヤーフロアブル	1:バタクロリト [*]	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△		
			4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアジン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			23		モベントフロアブル	1:スピロテメト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(本冊P.299)	
			28		ベネビアOD	1:シアントロニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(本冊P.299)	
			4C		トランスフオームフロアブル	1:ホルホサロル	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○タバココナジラミには効果低い	
			30		グレーシア乳剤	1:フルキサミド [*]	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
					ベミダタッチ	1:グリセリン脂肪酸脂肪酸エステル	500倍	収穫前日まで	-	普	○	○登録はタバココナジラミ類	
			34		フェイセーブフロアブル	1:フルホセチン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○土壌表面散布土壌混和処理	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵し、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	1B	発生前	カルボス粉剤	1:イキサチオン	6kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	普	△		
			3A	生育初期	ガードベイトA	1:ベルメリン	3kg/10a	生育初期	1回	普	○※	○株元散布 合ピレ(注)(本冊P.15)	
床土、本圃の土壌消毒													
土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照													
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 野外では越冬できず、施設内で越冬する。 ○ 8月以降発生が多くなり、年5~6世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫も、見つけたい捕殺する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット(4mm以下)等での被覆は、成虫の侵入防止に有効である。	15	発生前	ノーモル乳剤	1:テラフルアスロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			15	発初期	アタプロン乳剤	1:フルアスロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			15	発初期	マツチ乳剤	1:ルフェスロン	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			6		カスケード乳剤	1:フルエリクソン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			5		アニキ乳剤	1:ヒレクチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※		
			un		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			28		フレオフロアブル	1:ベリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド [*]	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			30		ヨーバルフロアブル	1:チトラリアロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					グレーシア乳剤	1:フルキサミド [*]	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
BT剤(参考資料P.15)参照													
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 夏~秋期に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ ハウス開口部に防虫ネット等(4mm目以下)を張り、侵入防止を図る。 ○ 幼虫は見つけ次第捕殺する。	15	発生前	アタプロン乳剤	1:フルフルアスロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			15	発初期	カスケード乳剤	1:フルアスロン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			6		マツチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			6		アフアーム乳剤	1:エマクタン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△※		
			5		アニキ乳剤	1:ヒレクチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※		
			5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○葉害等(注)(本冊P.299)	
			5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			13		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸リポソ(虫)スピノサト [*]	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			un		コテツフロアブル	1:フルロフエチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※		
			un		フレオフロアブル	1:ベリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド [*]	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			28		プレバトンフロアブル5	1:クロトコニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			28		ベネビアOD	1:シアントロニプロール	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(本冊P.299)	
			28		ヨーバルフロアブル	1:チトラリアロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			30		グレーシア乳剤	1:フルキサミド [*]	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
BT剤(参考資料P.15)参照													

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ト マ ト キ バ ガ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年に複数回の世代が発生し、繁殖力が高い。 ○ 卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度で、気温が低い時期はさらに延びる。 ○ 成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。 ○ 土中や葉の表面で蛹化。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。 ○ 被害葉や被害果は圃場内から持ち出すとともに、野外に放置せず速やかに適切に処分。 	発生前	28		ベリマークSC	1:シアントラニロアロール	25ml/400株	育苗期後半～ 定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～200(1株当り25～50ml)、混用(注)(P.300)
			発生初期	5		デオアナSC ダブルシユーターSE	1:ヒメノコ 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:ズビノ サト	2,500～5,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.299)
ハ モ グ リ バ エ 類	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発生の特徴 (発生の特徴) ○ 発生の主体は、トマトハモグ リバエである。 ○ 土着天敵への影響が大きい 薬剤(合成ピレスロイド系薬 剤や、有機リン系薬剤等)を 使用すると、その後多発する ことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 苗からの持ち込みを防ぐ。 ○ 成虫の侵入を防止するため、 め、ハウスの開口部に防虫 ネット等(1mm目以下(0.8mm 目以下が望ましい))を設置 する。 ○ 被害残渣は発生源となる ので、適切に処分する。 	発生前	4A 4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤	1:ジノアラン 1:ジノアラン	1～2g/株 1～2g/株	育苗期 育苗期	1回 1回	普	△	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 50ml/株灌水 展着剤は使用しない ○ 25ml/株灌水 展着剤は使用しない ○ 使用液量400株当り10～200 (1株当り25～50ml)、混用 (注)(本冊P.300)
			28		プレバソフフロアブル5	1:クロントラニロアロール	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 50ml/株灌水 展着剤は使用しない	
			28		プレバソフフロアブル5	1:クロントラニロアロール	100倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 25ml/株灌水 展着剤は使用しない	
			28		ベリマークSC	1:シアントラニロアロール	25ml/400株	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～200 (1株当り25～50ml)、混用 (注)(本冊P.300)	
			28		ヨーバルフロアブル	1:トラニロアロール	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 25ml/株灌水	
			4A+28		アペイル粒剤	1:アセタミプリト2:アントラニロ ロール	2g/株	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布	
			4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 株元散布、使用方法 (注)(P.300)	
			4A		アルバリン粒剤	1:ジノアラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和	
			4A		スタークル粒剤	1:ジノアラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和	
			4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	1～2g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理	
4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理				

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法							水産 (注)	注意事項		
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期			本剤の使 用回数	人 毒
ハモグリバエ類			生育期	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			生育期	6		コロマイト乳剤	1:シルベクチン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			生育期	6		アプアーム乳剤	1:エマクチン・安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普		
			生育期	5		アニキ乳剤	1:レピクチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			生育期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
マメハモグリバエ			生育期	5		ディアナSC	1:スピノトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			生育期	5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			生育期	17		トリガード液剤	1:シロマジン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			生育期	28		プレバノンフロアアブル5	1:クロラントエリリアロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			生育期	28		ベネビアOD	1:シアントラネリアロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			生育期	28		ヨーバルフロアアブル	1:シロアロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			生育期	un		プレオフロアアブル	1:トリダリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			生育期	30		グレーシア乳剤	1:フルキサミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			生育期	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			発生前	4A		モスピラン粒剤	1:アセチリクト	1g/株	定植時	1回	普		○ 植穴土壌混和 ○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ 使用液量400株当り10~200 (1株当り25~50ml)、混用 (注)(本冊P.300) ○ 植穴土壌混和 ○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ ヒラズハナアザミウマには効 果が劣る ○ IGR剤(注)(本冊P.15)
			生育期	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		
			生育期	28		プレバノンフロアアブル5	1:クロラントエリリアロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		
			発生前	28		ベリマーフSC	1:シアントラネリアロール	25ml/400株	育苗期後半 ~定植当日	1回	普		
生育期	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	1~2g/株	定植時	1回	普					
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 果実では、開花時に子房に産卵するため、産卵痕の周りが白く色が抜け、白ぶくれ症になる。 ○ 雑草(特にキク科)にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ 苗からの持ち込みを防ぐ。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。 ○ ハウス栽培では、天ビニールとして近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入抑制に有効である。ただし、マルチハチを使用する場合は注意する。	生育期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセチリクト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇			
		生育期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普			
		生育期	5		ディアナSC	1:スピノトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普			
		生育期	5		ダブルシユーターSE	1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普			
		生育期	15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普			
		生育期	30		グレーシア乳剤	1:フルキサミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普			
		生育期	34		ファインセーブフロアアブル	1:フロホキソ	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇			
		生育期	28		ヨーバルフロアアブル	1:シロアロール	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普			
		生育期	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普			
		生育期	13		コテツフロアアブル	1:クロルフェピル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇			

病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ハダニ類	<ul style="list-style-type: none"> ○ 養液栽培で発生が多い。 (発生の特徵) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に発生を受けた作物を放置しないことを徹底する。 ○ 発生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱・移動も考慮し、適切に実施する。 	発生初期	13 20D 5		コテツフロアブル マイトコナーフロアブル ダブルシユーターSE 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	1:クロルフェピル 1:ピフェナゼト 1:脂肪酸グリセリド(虫)2:スピノサト	2,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 1回 2回以内	劇 普 普	△※ △ △	○ 登録はナミハダニ ○ 葉害等(注)(本冊P.299)
トマトサビダニ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 養液栽培等ハウス内が乾燥する条件で発生が多い。 ○ 密度が高くなると葉が黄化する。 (発生の特徵) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ナス科雑草にも寄生するので、ハウス内や周辺の除草に努める。 	発生初期	4C 6 6 6 15 15 20D 13 21A 30 34		トランスフロアムフロアブル コロマイト乳剤 アファーム乳剤 アニキ乳剤 マツチ乳剤 カスケード乳剤 マイトコナーフロアブル コテツフロアブル ダニトロンフロアブル グレーシア乳剤 ファインセーブフロアブル 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	1:スルホキサフロ 1:シルベクチン 1:エマクチン安息香酸塩 1:レピクチン 1:ルフェスロン 1:フルヴェグスロン 1:ピフェナゼト 1:クロルフェピル 1:フェピロキサメト 1:フルキサミダ 1:プロトネン	1,000～2,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000～4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫開始14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 5回以内 3回以内 2回以内 2回以内 1回 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 劇 普 普 劇	○ △※ △※ △※ △※ △ △ △※ × × × ×	○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15)
カタメタムシ類	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主に夜間に活動する。 ○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害する。 (発生の特徵) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 圃場周辺の雑草や、前作の残渣を早めに処分する。 	生育全期	un		スラゴ メタアルデヒド剤(参考資料P.29)参照	1:隣酸第二鉄	1～5g/m ²	発生時	—	普	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置

[3] 甘長とうがらし

甘長とうがらし

※一部地域で「ジャンボししとう」と呼ばれる。万願寺とうがらし、伏見とうがらし、三宅とうがらし、ひもとうがらしも含まれる。農薬登録の「ししとう」とは異なる点に注意。

病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人水産 毒(注)	注意事項	薬剤防除法		
													薬剤防除法	薬剤防除法	
ウイルス病	(発生の特徵) ○病原ウイルスは、ToMV、PMMoV ○土壌伝染、種子伝染するウイルス病。 ○伝染力が強く、手、ハサミ等を通しての感染も高率で起こる。 ○抵抗性品種でもトウガラシ系統ウイルスには侵される。	(耕種的防除法) ○床土は無病土を使用する。 ○抵抗性品種を利用する。 ○発病株の早期抜き取り。 ○支柱等資を更新する。	(耕種的防除法) ○床土は無病土を使用する。 ○抵抗性品種を利用する。 ○発病株の早期抜き取り。 ○支柱等資を更新する。										・リンレックス水和剤、コロト顆粒水和剤、コロマイト乳剤は、「甘長とうがらし」登録。 ・カリグリーン、ハーモメイト水溶液は、「野菜類」登録。 ・それ以外の薬剤は、「とうがらし類」登録。		
青枯病	(発生の特徵) ○病原ウイルスは、CMV、BBWV ○虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 ○露地栽培で被害が大きい。	(発生の特徵) ○連作を避ける。 ○発生圃場は3年程度水田化。 ○5年以上の輪作。 ○石灰を多量に施す(200kg/10a)。 ○有機質を施し、敷わらやマルチ等により地温を著しく高くしない。	(耕種的防除法) ○シムバマーマルチやシムバレーター等により、アブラムシ類の飛来防止。 ○圃場周辺の雑草を除去。 アブラムシ類防除の項(P.24)参照 ○排水を図り、多湿を避ける。 ○根傷みのないよう管理作業には十分注意。 ○発病株に触れないようにし、作業後は石鹸等で洗う。 ○被害株を除去。						(防除上のポイント) ○アブラムシ類の防除を徹底する。						
斑点細菌病	(発生の特徵) ○高温多湿下で発生が多く、露地栽培での被害が大きい。 ○多発すると、果実では小円形のそつが症状となることがある。 ○発病により激しく落葉することがある。	(発生の特徵) ○導管が褐変し、切断面から乳白色の菌泥が出る。	(耕種的防除法) ○低湿地での作付を避け、排水対策を講じる。 ○連作を避ける。 ○窒素質肥料の偏用を避け、カリ肥料を十分施す。												
疫病	(発生の特徵) ○軟弱な苗で発生が多い。 ○梅雨入り後や曇雨天(20℃前後)の低温で多湿条件が続くと発生しやすく、窒素過多、多湿環境は発病を著しく助長する。	(発生の特徵) ○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の適正な水管理。 ○露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止。可能ならば雨よけ栽培とする。 ○排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ○被害茎葉は第二次伝染源となるので除去。 ○被害茎葉残渣は感染源になるので、栽培後は圃場外で適切に処分。	(発生の特徵) ○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の適正な水管理。 ○露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止。可能ならば雨よけ栽培とする。 ○排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ○被害茎葉は第二次伝染源となるので除去。 ○被害茎葉残渣は感染源になるので、栽培後は圃場外で適切に処分。	24+M1 24+M1	カスミンポルドー カッパーシン水和剤	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅		1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	5回以内 5回以内	普 普				
立枯病	(発生の特徵) ○軟弱な苗で発生が多い。	(発生の特徵) ○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の適正な水管理。	(発生の特徵) ○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の適正な水管理。												
疫病	(発生の特徵) ○梅雨入り後や曇雨天(20℃前後)の低温で多湿条件が続くと発生しやすく、窒素過多、多湿環境は発病を著しく助長する。	(発生の特徵) ○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の適正な水管理。 ○露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止。可能ならば雨よけ栽培とする。 ○排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ○被害茎葉は第二次伝染源となるので除去。 ○被害茎葉残渣は感染源になるので、栽培後は圃場外で適切に処分。	(発生の特徵) ○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の適正な水管理。 ○露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止。可能ならば雨よけ栽培とする。 ○排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ○被害茎葉は第二次伝染源となるので除去。 ○被害茎葉残渣は感染源になるので、栽培後は圃場外で適切に処分。	21 21	ランマンフロアアブル ライメイフロアアブル	1:ジノブアゾド 1:アズルプロム		2,000倍 2,000~4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内	普 普				
白絹病	(発生の特徵) ○高温多湿条件下で発生が多くなる。 ○前作物物の残渣や未熟堆肥のすき込みは、発病を助長する。	(発生の特徵) ○連作を避け、床土は無病土を使用する。 ○3~4年間水稲と輪作するか、田畑輪換。 ○定植前に石灰を施用し、土壌pHを矯正。 ○無病苗の定植。 ○被害株、病原菌の付いた敷わら等は、菌核を落とさないように圃場外へ持ち出す。 ○発病株周辺の表土は菌核が多いので、土中深く埋め込む。	(発生の特徵) ○連作を避け、床土は無病土を使用する。 ○3~4年間水稲と輪作するか、田畑輪換。 ○定植前に石灰を施用し、土壌pHを矯正。 ○無病苗の定植。 ○被害株、病原菌の付いた敷わら等は、菌核を落とさないように圃場外へ持ち出す。 ○発病株周辺の表土は菌核が多いので、土中深く埋め込む。												
				14	リンレックス水和剤	1:トリクロホスメチル		1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普		○10/m ² 株元灌水		

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等		耕種的防除法		時期		IRAC コード		FRAC コード		使用薬剤		一般名		濃度(使用量)		使用時期		本剤の 使用回数		人 毒		水産 (注)		注意事項	
うどんこ病		(発生の特徴) ○ 他作物のうどんこ病のように表面に粉体を作らない。 ○ 窒素過多・肥切れのないよう適正に肥培管理。 ○ 密植、過繁茂を避ける。	被害残渣は圃場外で適切に処分。 ○ 発病した茎葉を除去。 ○ 窒素過多・肥切れのないよう適正に肥培管理。 ○ 密植、過繁茂を避ける。	発病初期		3 11 11+7 NC NC 24+M1	フリー水和剤 トリアミン水和剤 ストロビーフロアブル シグナムWDG カリグリーン ハーモメイト水溶剤 カスミンボルドー 微生物農薬(参考資料P.20)参照 銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照	1:シロブタケル 1:トリアミン水和剤 1:カトキシムメチル 1:ピラホストロビン2:ボスカド 1:炭酸水素ナトリウム 1:炭酸水素ナトリウム 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	4,000～5,000倍 4,000～5,000倍 4,000倍 2,000倍 800～1,000倍 800～1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 5回以内 2回以内 2回以内 - - 5回以内	普 普 普 普 普 普	○ △ △ △※ ○ △ △	○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 葉害等(注)(本冊P.299)													
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)・多湿条件で発生。 ○ 予防散布を徹底。	○ 花卉・果実・茎・葉等で発生、被害部は感染源となるので除去。 ○ 密植を避ける。	花弁・果実・茎・葉等で発生、被害部は感染源となるので除去。 ○ 密植を避ける。	発病前初期		11+7 7	シグナムWDG カクタストライフロアブル 銅剤及び混合剤(本冊P.317)、くん煙剤(本冊P.316)	1:ピラホストロビン2:ボスカド 1:ボスカド	2,000倍 1,000～1,500倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△※ ○	○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 葉害等(注)(本冊P.299)													
斑点病	(防除上のポイント) ○ 予防散布を徹底。	○ 通風、採光を良くするため過繁茂を避ける。 ○ 発病葉は早期に除去。	通風、採光を良くするため過繁茂を避ける。 ○ 発病葉は早期に除去。	発病前		3 24+M1	フリー水和剤 カスミンボルドー	1:シロブタケル 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	4,000～6,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 5回以内	普 普	○ △														
炭疽病	(発生の特徴) ○ 降雨や灌水時の土壌の跳ね上がりにより分生子が飛散し感染する。 ○ 傷口から感染しやすい。 ○ 近年、県内では、 <i>Colletotrichum scovillei</i> による炭疽病が確認されており、従来の <i>C.capusici</i> 、 <i>C.guloeosporioides</i> に比べ被害が激しい。 (防除上のポイント) ○ 予防散布に重点を置く。	○ 発病葉や発病果は発見次第除去。 ○ 雨よけ栽培やマルチ被覆等により、降雨による跳ね上がりを防ぐ。 ○ 果実に傷つかないよう支柱や枝つり等で固定する。	発病前 発病初期			11+7 11	シグナムWDG スクレアフロアブル	1:ピラホストロビン2:ボスカド 1:マブスタロピオン	2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	普 普	△※ ○	○ 株元散布 ○ 25～50ml/株(注)(本冊P.299) ○ 植穴又は株元土壌混和 ○ 植穴土壌混和													
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ワタアブラムシである。 ○ 露地栽培では、7～9月に発生が多い。 (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部地域で認められている。	○ シルバーマルチやシルバーテープ等を使用。 ○ 圃場内外の除草。	発生前	4A 23 4A 4A		アドマイヤー1粒剤 モベントフロアブル アドマイヤー1粒剤 モスベラン粒剤	1:ミダクロプロアト 1:ステプロアト 1:ミダクロプロアト 1:アセタミプロアト	1g/株 500倍 1～2g/株 0.5g/株	育苗期後半 育苗期後半～定植当日 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	△ ○ △ △	○ 株元散布 ○ 25～50ml/株(注)(本冊P.299) ○ 植穴又は株元土壌混和 ○ 植穴土壌混和														

病害虫名		病害虫の特徵 防除上のポイント等		耕種的防除法		薬剤防除法									
時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項					
コナジラミ類	発生前	4A 4A 23 28	アルバリン粒剤 スタークル粒剤 モベントフロアブル ブレバソンフロアブル5	1:ジノチフラン 1:ジノチフラン 1:スピロトキサト 1:クロフエンチアゾニリアール	1g/株 1g/株 500倍 100倍	育苗期	1回	普	△	株元散布					
						育苗期後半～定植当日	1回	普	△	株元散布					
コナジラミ類	発生初期	4A 4A 6 6 9B 23	ダントツ水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 コロマイト乳剤 アニキ乳剤 コルト顆粒水和剤 モベントフロアブル	1:カチオン 1:ジノチフラン 1:ジノチフラン 1:シルベキチン 1:レピクチン 1:ピリラルキナゾン 1:スピロトキサト	2,000～4,000倍 2,000～3,000倍 2,000～3,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 4,000倍 2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)(本冊P.299)					
						収穫前日まで	2回以内	普	△						
ネキリムシ類	発生前	1B	ダイアジンノ粒剤5	1:ダイアジン	4～6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○全面土壌混和又は作業土壌混和					
						発生初期	2回以内	普	○※						
オオタバコガ	発生初期	15 6 28 28 13 un	マツチ乳剤 アファーム乳剤 フェニックス顆粒水和剤 ブレバソンフロアブル5 コテツフロアブル プレオフロアブル	1:メフェスロン 1:エマクチン安息香酸塩 1:フルベンシジアド 1:クロフエンチアゾニリアール 1:クロルフェニル 1:ピリダリル	2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)					
						収穫7日前まで	2回以内	普	△※						
ハスモンヨトウ	発生前	28	ブレバソンフロアブル5	1:クロフエンチアゾニリアール	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○登録はタバコガ類					
						発生初期	3回以内	普	△※						
ミナミキイロアザミウマ	発生初期	6 28	アニキ乳剤 ブレバソンフロアブル5	1:レピクチン 1:クロフエンチアゾニリアール	2,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※						
						発生初期	3回以内	普	△						
ミナミキイロアザミウマ		ミナミキイロアザミウマの項(本冊P.308)参照													

病害虫名		薬剤防除法											
病害虫名	病害虫の特徴 防除法上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ハダニ類	○ 発生初期に丁寧に散布。 ○ 系統の異なる薬剤によるローテーション防除。	○ 圃場内外の除草に努める。 ○ 隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分、雑草の刈り払い等は、ハダニの離脱・移動も考慮し適切に実施。 ○ 発生初期は一部の株に集中的に発生する傾向がある。るので、早期発見に努める。	発生前 発生 発生初期	23 21A 13 23		モベントフロアブル ダニトロンフロアブル コテツフロアブル モベントフロアブル	1:スベロトアマト 1:フエンピロトアマト 1:ホルフェピル 1:スベロトアマト	500倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	育苗後半～定植当日 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 1回 2回以内 3回以内	普 普 劇 普	○ × △※ ○	○ 50m ³ /株灌水(注)(P.299) ○ 葉害等(注)(P.299)
チャノホコリダニ	(発生の特徴) ○ 生長点や新葉に寄生が多い。 (防除法上のポイント) ○ 発生初期に生長点によくかかるよう散布。	○ 芯止まり株の除去。	発生前 発生 発生初期	23 6 23		モベントフロアブル アニキ乳剤 モベントフロアブル	1:スベロトアマト 1:レピカチン 1:スベロトアマト	500倍 2,000倍 2,000倍	育苗後半～定植当日 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 3回以内 3回以内	普 普	○ △※ ○	○ 50m ³ /株灌水 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 葉害等(注)(本冊P.299)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法					本剤の 使用回数	水産 (注)	注意事項	
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)				使用時期
ウイルス病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 病原ウイルスは、ToMV、PMMoV 土壌伝染、種子伝染するウイルス病。 伝染力が強く、手、ハサミ等を通しての感染も高率で起こる。 抵抗性品種でもトウガラシ系統ウイルスには侵される。 	<p>(耕種的防除)</p> <ul style="list-style-type: none"> 床土は無病土を使用する。 抵抗性品種を利用する。 発病株の早期抜き取り。 支柱等資材を更新する。 	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	水産 (注)	<ul style="list-style-type: none"> リンレックス水和剤、モスピラン粒剤、コロマイト乳剤、アタプロン乳剤、フェルコシフロアブル、コテツフロアブルは、「ししどろ」登録。 カリグリーン、ハーモメイト水溶剤は、「野菜類」登録。 それ以外の薬剤は、「とうがらし類」登録。
青枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 病原ウイルスは、CMV、BBWV 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 露地栽培で被害が大さい。 	<p>(耕種的防除)</p> <ul style="list-style-type: none"> 圃場周辺の雑草を除去。 	アブラムシ類防除の項(P.28)参照		(防除上のポイント)	○ アブラムシ類の防除を徹底する。					
青枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 日中に生長点付近の葉が萎れ、朝夕は回復するが、やがて株全体が萎れて青枯れ状態になる。 導管が褐変し、切断面から乳白色の菌泥が出る。 	<p>(耕種的防除)</p> <ul style="list-style-type: none"> 連作を避ける。 発生圃場は3年程度水田化。 5年以上の輪作。 石灰を多量に施す(200kg/10a)。 有機質を施し、敷わらやマルチ等により地温を著しく高くない。 	アブラムシ類防除の項(P.28)参照		○ 排水を図り、多湿を避ける。 ○ 根傷みのないよう管理作業には十分注意する。 ○ 発病株に触れた手で健全株に触れないようにし、作業後は石鹸等で洗う。 ○ 被害株を除去。						
斑点細菌病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 高温多湿下で発生が多く、露地栽培での被害が大さい。 多発すると、果実では小円形のさつが症状となることもある。 発病により激しく落葉することもある。 	<p>(耕種的防除)</p> <ul style="list-style-type: none"> 低湿地での作付を避け、排水対策を講じる。 連作を避ける。 窒素質肥料の偏用を避け、カリ肥料を十分施す。 	土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照		○ 排水を図り、多湿を避ける。 ○ 根傷みのないよう管理作業には十分注意する。 ○ 発病株に触れた手で健全株に触れないようにし、作業後は石鹸等で洗う。 ○ 被害株を除去。						
病苗立枯	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 軟弱な苗で発生が多い。 	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 床土は無病土を使用する。 育苗中の適正な水管理。 	24+M1	カスミンボルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
疫病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 梅雨入り後や曇雨天(20℃前後)の低温で多湿条件が続くと発生しやすい。窒素過多、多湿環境は発病を著しく助長する。 	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止。可能ならば雨よけ栽培とする。 排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 被害茎葉は第二次伝染源となるので除去。 被害茎葉残渣は感染源になるので、栽培後は圃場外で適切に処分。 	24+M1	カッパバーシン水和剤	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
疫病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 梅雨入り後や曇雨天(20℃前後)の低温で多湿条件が続くと発生しやすい。窒素過多、多湿環境は発病を著しく助長する。 	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止。可能ならば雨よけ栽培とする。 排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 被害茎葉は第二次伝染源となるので除去。 被害茎葉残渣は感染源になるので、栽培後は圃場外で適切に処分。 	21	ランマンフロアブル	1:シアブアテノド	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
			21	ライメイフロアブル	1:アズムクロム	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 水産 毒 (注)	注意事項
白網病	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高温多湿条件下で発生が多くなる。 ○ 前作物の残液や未熟堆肥のすき込みは、発病を助長する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 連作を避け、床土は無病土を使用する。 ○ 3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換。 ○ 定植前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正。 ○ 無病苗を定植。 ○ 被害株、病原菌の付いた藪わら等は、菌核を落とさないように圃場外へ持ち出す。 ○ 発病株周辺の表土は菌核が多いので、土中深く埋め込む。 	発病前		14	リフレックス水和剤	1:トリクロボスメチル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○ 10/㎡株元灌水
うどんこ病	<ul style="list-style-type: none"> ○ (発生の特徴) ○ 他作物のうどんこ病のように表面に粉体を作らない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 被害残渣は圃場外で適切に処分。 ○ 発病した茎葉を除去。 ○ 窒素過多・肥切れのないよう適正に肥培管理。 ○ 密植、株の過繁茂を避ける。 	発病初期		3 3 11 11+7 NC NC 24+M1	フリー水和剤 トリフミン水和剤 ストロビーフロアブル シグナムWDG カリグリーン ハーモメイト水溶剤 カスミンボルドー	1:シロプロタール 1:シロプロタール 1:トリフルズノール 1:トリフミン水和剤 1:ピラロホロビン2:ボスガド* 1:炭酸水素カリウム 1:炭酸水素ナトリウム 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	4,000～6,000倍 4,000～5,000倍 4,000倍 2,000倍 800～1,000倍 800～1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 5回以内 2回以内 2回以内 - - 5回以内	普 普 普 普 普 普 普	○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 葉害等(注)(本冊P.299)
斑点病	<ul style="list-style-type: none"> ○ (防除上のポイント) ○ 予防散布を徹底。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 通風、採光を良くするため過繁茂を避ける。 ○ 発病葉は早期に除去。 	発病前		3 24+M1	フリー水和剤 カスミンボルドー	1:シロプロタール 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	4,000～6,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 5回以内	普 普	
炭疽病	<ul style="list-style-type: none"> ○ (発生の特徴) ○ 降雨や灌水時の土壌の跳ね上がりにより分生子が飛散し感染する。 ○ 傷口から感染しやすい。 ○ 近年、県内では、<i>Colletotrichum scovillei</i>による炭疽病が確認されており、従来の<i>C. capsici</i>、<i>C. guloeosporitoides</i>に比べ被害が激しい。 ○ (防除上のポイント) ○ 予防散布に重点を置く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発病葉や発病果は発見次第除去。 ○ 雨よけ栽培やマルチ被覆等により、降雨による跳ね上がりを防ぐ。 ○ 果実に傷がつかないよう支柱や枝つり等で固定する。 	発病前 発病初期		11+7 11	シグナムWDG スクレアフロアブル	1:ピラロホロビン2:ボスガド* 1:マンデストロン	2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	普 普	
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> ○ (発生の特徴) ○ 発生の主体は、ワタアブラムシである。 ○ 露地栽培では、7～9月に発生が多い。 ○ (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部の地域で認められている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ シルバーマルチやシルバーナタープ等を使用する。 ○ 圃場内外の除草。 	発生前	4A 23		アドマイヤー1粒剤 モベントフロアブル アドマイヤー1粒剤 モスベラン粒剤	1:ミダクロプリト* 1:ステロテアマト 1:ミダクロプリト* 1:アセチミプリト*	1g/株 500倍 1～2g/株 0.5g/株	育苗期後半 育苗期後半～定植当日 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	○ 株元散布 ○ 25～50ml/株灌水、葉害等(注)(本冊P.299) ○ 植穴又は株元土壌混和 ○ 植穴土壌混和
			発生初期	9B 9B 23		チェズ顆粒水和剤 コルト顆粒水和剤 モベントフロアブル	1:ピエトロシン 1:ピリアルキナゲン 1:ステロテアマト	5,000倍 4,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普	○ 葉害等(注)(本冊P.299)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
コナジラミ類	○ 葉裏に十分散布。 ○ 防除上のポイント)	○ 無寄生苗を定植。 ○ 周辺雑草は発生源となるので、圃場内外の除草。	発生前	4A 4A 23 28		アルバリン粒剤 スタークル粒剤 モベントフロアブル ブレバソンフロアブル5	1:シノチアフラン 1:シノチアフラン 1:スピロテトアト 1:クロチアトニコリリアアロール	1g/株 1g/株 500倍 100倍	育苗期 育苗期 育苗期後半～定植当日 育苗期後半～定植当日	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	△ △ ○ △	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 25～50ml/株灌注、葉害等(注)(本冊P.299) ○ 25ml/株灌注
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 夏～秋期に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 被害果を除去。 ○ 幼虫は見つけ次第捕殺。	発生前 発初期	15 15 18 6 28 28 13 un		アタプロン乳剤 マツチ乳剤 ファルコンフロアブル アファーム乳剤 フェニックス顆粒水和剤 ブレバソンフロアブル5 コテツフロアブル プレオフロアブル	1:クロチアフラン 1:ルフェスロン 1:メキシフェノソド 1:エマクチン安息香酸塩 1:フルベンジリアド 1:クロチアトニコリリアアロール 1:クロチアトニコリリアアロール 1:ピリタリル	2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 4回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △※ △※ △※ △※ △	○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ 登録はタバコガ類
ミナミキイロアザミウマ		ミナミキイロアザミウマの項(本冊P.308)参照											

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項									
														薬剤防除法								
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> 防除上のポイント 食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。 予防散布を徹底する。 	<ul style="list-style-type: none"> アブラナ科作物の連作を避ける。 低湿地を避け、排水を良くする。 発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。 	発病前初期			銅剤及び混合剤(本冊P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項									
														7	パレード20フロアブル	1:ピラゾフホスト	100倍	育苗後半～定植当日	1回	普	○ はなやさい類で登録	
														1 7 7 11 11	トプジンM水和剤 ベンレート水和剤 アフェートフロアブル パレード20フロアブル スクレアフロアブル メジャーフロアブル	1:チオアネートメチル 1:ベ/ミル 1:ベンチオピド 1:ピラゾフホスト 1:マックストロン 1:ピコキストロン	2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普	△ △ △ ○ ○ ○ ○	○ はなやさい類で登録 ○ はなやさい類で登録 ○ はなやさい類で登録 ○ はなやさい類(ブロッコリーを除く)で登録
21 11	ライメイフロアブル メジャーフロアブル	1:アミルプロム 1:ピコキストロン	2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内	普 普	△ △	○ はなやさい類(ブロッコリーを除く)で登録														
べと病	<ul style="list-style-type: none"> 多湿条件で発生が多くなる。また、肥料切れや草勢が低下した時に多発しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> 密植を避け、通風をよくする。 肥切れしないようにする。 	発病初期			銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項									
														29	フロンスイトSC	1:フルジナム	500mℓ/10a	定植前	1回	普	×	○ 100～1500の水で希釈し全面散布後土壌混和 ○ かぶれ注意 ○ 全面土壌混和 ○ 使用方法(注)(本冊P.300) ○ 全面土壌混和
														36 21 21	ネピリュウ オラクル顆粒水和剤 オラクル粉剤	1:フルスフロスト 1:アミルプロム 1:アミルプロム	20～30kg/10a 200～500倍 30kg/10a	定植前 定植前 定植前	1回 1回 2回以内	普 普 普	○※ ○※ ○※ ○※	
根こぶ病	<ul style="list-style-type: none"> だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 根こぶが腐敗すると大量の休眠胞子が放出される。 休眠胞子は表土15cmまでに多い。 本圃の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。 おとり作物の葉だいこん等を間作する。 	<ul style="list-style-type: none"> 多発ほ場での作付を避ける。 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 排水を良くし高畝とする。 アブラナ科雑草(クネツケバナ、ナズナ等)を除草する。 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し、適正に処分する。 市場性を考慮しながら抵抗性品種を作付する。 	作付前			銅剤及び混合剤(本冊P.301)参照	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項									
														29	フロンスイトSC	1:フルジナム	500mℓ/10a	定植前	1回	普	×	
														36 21 21	ネピリュウ オラクル顆粒水和剤 オラクル粉剤	1:フルスフロスト 1:アミルプロム 1:アミルプロム	20～30kg/10a 200～500倍 30kg/10a	定植前 定植前 定植前	1回 1回 2回以内	普 普 普	○※ ○※ ○※ ○※	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒(注)	水害(注)	注意事項		
														1:ダイジジン 1:ベルモリン	4~6kg/10a 3kg/10a
ネキリムシ類	○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 (防除上のポイント) ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ 育苗中は寒冷紗等被覆により有翅虫の飛来を防止する。	発生前	1B		ダイジジン粒剤5 ガードベイトA	1:ダイジジン 1:ベルモリン	4~6kg/10a 3kg/10a	は種時又は定植時 生育初期	2回以内 5回以内	普 普	× <td>○全土壌混和又は作業土壌混和 ○株元散布 ○合ピレ(注)本冊(P.15)</td>	○全土壌混和又は作業土壌混和 ○株元散布 ○合ピレ(注)本冊(P.15)		
			発生前	4A		アクタラ粒剤5 ベストガード粒剤	1:チャイトキヤム 1:ニテピラム	0.5g/株 50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半 育苗期後半	1回 1回	普 普	× <td>○株元散布 ○使用方法(注)本冊P.300</td>	○株元散布 ○使用方法(注)本冊P.300		
			発生前	4A		ベストガード粒剤	1:ニテピラム	1g/株	定植時	1回	普	△			
			発生前	1B		マラン乳剤	1:マラン	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△			
			発生前	3A		アデオン乳剤	1:ベルモリン	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	× <td></td> <td></td>			
			発生前	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセギアゾリド 1:アスタキヤム	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△			
			発生前	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チャイトキヤム	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△			
			発生前	9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリクリタノン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
			発生前	28		フレバソックスフロアブル5	1:クロロトラネリプロロール	100倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△			
アオムシ	○ 標準和名は、モンシロチョウ。 ○ 春~初夏及び10~11月に被害が多い。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		ベリマークSC	1:シアンロニプロロール	400倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)本冊P.300		
			発生前	4A		モスピラン粒剤	1:アセギアゾリド	0.5~1g/株	定植前日~定植当日	1回	普	△	○株元散布		
			発生前	1B		マラン乳剤	1:マラン	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△			
			発生前	5		デアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
			発生前	6		アファーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※			
			発生前	28		フレバソックスフロアブル5	1:クロロトラネリプロロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
			発生前	30		グレンシア乳剤	1:フルキサミッド	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○はなやさい類で登録		
			発生前	30		フロリアSC	1:プロプラニール 1:プロホキソ	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○はなやさい類で登録		
コナガ	○ 春~初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬季も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○ 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすすいので、同一系統の薬剤を連用しない。 ○ シアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。 ○ 有効な薬剤を長持ちさせたいために、薬剤の薬性値等を考慮効果的な防除を実施する。	○ 次世代の増殖源となる収穫残渣の早期処分。発生放任圃場を作らない。	前発	28		ベリマークSC	1:シアンロニプロロール	400倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)本冊P.300		
			発生前	15		アダプロン乳剤	1:クロフルアスロ	2,000倍	収穫4日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)本冊P.15)参照		
			発生前	6		アニーキ乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※			
			発生前	5		スピアエース顆粒水和剤	1:スピアノド	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△			
			発生前	5		デアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
			発生前	13		コテツフロアブル	1:クロルフェネル	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△			
			発生前	30		グレンシア乳剤	1:フルキサミッド	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○はなやさい類で登録		
			発生前	30		フロリアSC	1:プロプラニール 1:プロホキソ	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○はなやさい類で登録		
			発生前	un		プレオフロアブル	1:ピリクリタノン	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△			
			発生前	34		ファインセーブフロアブル	1:プロホキソ	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△			
			発生前	34		アクセルフロアブル	1:メタフルギン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△			
			発生前	22B		BT剤(参考資料P.15)参照									

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒 (注)	水産 (注)	注意事項
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○年2回発生、5月、10月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生初期	28 un 22B		フェニックス顆粒水和剤 プレオフロアブル アクセルフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照 プレバノンフロアブル5 ベリマーグSC	1:フルベシア [※] 1:ピリダリル 1:メタアルミン	2,000~4,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	△ △ ○	
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○年5~6回の発生、被害は9~10月に集中する。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28 28		アニキ乳剤 プレバノンフロアブル5 グレーシア乳剤 プロフレアSC プレオフロアブル	1:レピダチン 1:クロフントアエリプロール 1:フルキキマ [※] 1:プロアラニ [※] 1:ピリダリル	100倍 400倍	育苗期後半~定植当日 育苗期後半~定植当日	1回 1回	普 普	△ △	○使用方法(注)(本冊P.300) ○使用方法(注)(本冊P.300)
ハイメダラノメイガ	(発生の特徴) ○別名(ダイコンシンクイムシ)。 ○夏期の高温少雨で多発する。 ○7~10月に発生が多くなる。 ○幼虫は、生長点付近を食害する。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生初期	28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベシア [※]	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○はなやさい [※] 類で登録 ○はなやさい [※] 類で登録

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	水産 人 毒 (注)	注意事項
萎黄病	<ul style="list-style-type: none"> ヒメフタテンヨコバイが媒介するファイトプラズマ病。 年内取りの作型に発生が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 発病圃場では連作をしない。 排水不良を改善。 傷口から侵入するので、傷を生じないように管理作業を心がける。 	結球始め～結球中期	銅剤及び混合剤(P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)								
軟腐病	<ul style="list-style-type: none"> 防除上のポイント) ヨトウムシ類などの食害部から病原細菌が侵入するのでこれらの害虫を防除。 											
斑点細菌病	<ul style="list-style-type: none"> 被害株(葉)を圃場に放置しない。 	<ul style="list-style-type: none"> 苗は軟弱徒長にせず、でさるだけ傷をつけない。 	時定植	U18		ハリダジン液剤5 スターナ水和剤 カセット水和剤	1:ハリダジン 1:オキリニック酸 1:オキリニック酸2:カスガマイシン 1:プロベナゾール	800倍 2,000倍 1,000倍 6~9kg/10a	収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 定植時	3回以内 2回以内 2回以内 1回	普 普 普 普	○トマト・さくへの飛散注意。 ○土壌混和
腐敗病	<ul style="list-style-type: none"> 凍霜害は発生を助長。 悪臭がないことで軟腐病と区別可能。 		<ul style="list-style-type: none"> 苗は軟弱徒長にせず、でさるだけ傷をつけない。 マルチ等により多湿条件を緩和。 	時定植	P2		銅剤及び混合剤(P.317) オリゼメート粒剤	1:プロベナゾール	6~9kg/10a	定植時	1回	普
菌核病	<ul style="list-style-type: none"> (防除上のポイント) 発病後は急速にまん延するので、予防散布を徹底。 	<ul style="list-style-type: none"> 発病圃場は早期除去、菌核を圃場に残さない。 		前発病	7		パレード20フロアブル	1:ピラジフルホリド	100倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普
灰色かび病	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) 葉の基部、下葉に発生しやすい。 実際、葉の基部が侵されると萎れる場合がある。 褐色部分には灰色のかびを生じる。 		<ul style="list-style-type: none"> マルチ等により多湿条件を緩和。 発病株は早めに抜き取り、土中に埋め込む等の処理を行い、伝染源としない。 	発病初期	11		トップジンM水和剤 アミスター20フロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 スクレアフロアブル	1:チオアブネートトマル 1:アゾキシストロビン 1:ピルヘンカルブ 1:マンデスロビン	1,500~2,000倍 2,000倍 2,000~3,000倍 2,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで	2回以内 4回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普
				発病初期	7		ファンタジスタフロアブル アフェットフロアブル パレード20フロアブル	1:ボスカト 1:ベンチオレト 1:ピラジフルホリド	1,000~1,500倍 2,000倍 2,000~4,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普
			発病初期	19		バイオレット水和剤 微生物農薬(参考資料P.20)参照	1:ポリオキシンド亜鉛塩	500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○使用方法(注)(本冊P.299)

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント)		耕種的防除法		時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
すそ枯病	○ 発病初期に、株元にもよくかかるよう散布。	○ 深植えしない。 ○ 密植は発病を助長するので適切な株間にする。	発病初期	29	フロキサジンA フロキサジンA	30kg/10a 50m ² /10a	1回 1回	普 普	△※ ×	○ 全面土壌混和 ○ 100～150ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和 ○ トマト・きくへの飛散注意。						
アブラムシ類	○ 発生の特徴 (発生の特徴) ○ 主要種はモモアカアブラムシとヒゲナガアブラムシ類。 (防除上のポイント) ○ 抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用不可。	○ 育苗中は寒冷紗等の被覆で有翅虫の飛来防止。	発生前	4A 4A	ダントツ粒剤 ダントツ粒剤	0.5g/株 50g/セル成型育苗トレイ11箱またはペーパーポット1冊	1回 1回	普 普	△ △	○ 株元処理 ○ 使用方法(注)(本冊P.299)						
		○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材は有翅虫の飛来抑制に有効。	28+4A 4A+28	アクタラ粒剤5 ジェリボフロアブル アベール粒剤	0.5g/株 200倍 40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	1回 1回 1回	普 普 普	×	○ 株元散布 ○ 使用方法(注)(本冊P.299) ○ 使用方法(注)(本冊P.300)、回数注意							
			28		ベリマークSC	400倍	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(本冊)、回数注意						
			28		ヨーバルフロアブル	200倍	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.299)						
			4A		モスピラン粒剤	0.25～0.5g/株	1回	普	△	○ 株元散布						
			4A 4A		アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 キックオフ顆粒水和剤	50～100倍 50～100倍 100倍	1回 1回 1回	普 普 普	△ △ △	○ 使用方法(注)(本冊P.299) ○ 使用方法(注)(本冊P.299) ○ 使用方法(注)(本冊P.299)						
			4A 4A		アルバリン粒剤 スタークル顆粒剤	2g/株 2g/株	1回 1回	普 普	△ △	○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和						
			4A 4A 4A 4A 4A 4C 14 21A 29 9B 23		アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 トランスフォームフロアブル リープガード顆粒水和剤 ハチハチフロアブル ウアラDF コルト顆粒水和剤 モベントフロアブル 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	4,000倍 4,000倍 2,000～4,000倍 2,000～3,000倍 2,000～3,000倍 2,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍 3,000～4,000倍 2,000～4,000倍	2回以内 1回 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 1回 2回以内 3回以内 3回以内	劇 劇 普 普 普 普 劇 劇 普 普 普	△ △ △ △ △ ○ △ × ○ △ ○ △ ○	○ 目に刺激痛、かぶれ注意 ○ アルカリ性農薬・肥料と混用不可						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒(注)	水害(注)	注意事項
シロネ コメ コメ コメ コメ コメ	○ 若齢幼虫期に防除。 (防除上のポイント)	○ 育苗中は寒冷紗などの被覆で飛来を防止。 ○ シルバーホリ等の畝マルチも飛来防止に有効。	発生前	28		ベリマークSC	1:ジアントラニロリアロール	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(本冊P.300)、回数注意
ネギ キリ ムシ シ 類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除き見られる。5～9月に異常発生することがある。	○ 前作や作付前の雑草で生育した幼虫が加害することが多い。作付予定地では予め除草、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。	発生初期	22B 3A		アケセルベイト ガードベイトA	1:イキサチオン 1:イキサチオン 1:イキサチオン 1:クロアトニロリアロール2:ジノテプレン	6kg/10a 6kg/10a 3kg/10a 100倍 3～6kg/10a 3kg/10a	は種時又は植付時 は種時又は植付時 は種時又は定植時 定植前日～定植時	2回以内 2回以内 2回以内 1回 2回以内 2回以内	普 劇 普 普	△ △ △ △ ○ ○※	○ 土壌表面散布土壌混和処理 ○ 土壌表面散布土壌混和処理 ○ 土壌表面散布土壌混和処理 ○ 土壌表面散布土壌混和処理 ○ 使用方法(注)(本冊P.300)、登録はカブラヤガ
ヨトウ ムシ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。	発生前	28 28+4A		アプレバソフロアブル5 ジュリポフロアブル ヨーバルフロアブル アベイル粒剤	1:クロアトニロリアロール 1:クロアトニロリアロール2:チアトキサム 1:アトニロリアロール 1:アセタミプリト2:シアントラニロリアロール	100倍 200倍 200倍 40g/セル成型育苗トレイ1箱またはベーパーポット1冊	育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	△ △ △ ○	○ 使用方法(注)(本冊P.300) ○ 使用方法(注)(本冊P.300) ○ 使用方法(注)(本冊P.300) ○ 使用方法(注)(本冊P.300)、回数注意
ハス モン ヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。	発生前	28 28 28+4A 28 28+4A		BT剤(参考資料P.15)参照 アプレバソフロアブル5 ベリマークSC ジュリポフロアブル ヨーバルフロアブル キックオフ顆粒水和剤	1:クロアトニロリアロール 1:ジアントラニロリアロール 1:クロアトニロリアロール2:チアトキサム 1:アトニロリアロール 1:クロアトニロリアロール2:ジノテプレン	100倍 400倍 200倍 200倍 100倍	育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 育苗期後半 ～定植当日 定植前日～定植時	1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普	△ △ △ △ △	○ 使用方法(注)(本冊P.300) ○ 使用方法、混用(注)(本冊P.300)、回数注意 ○ 使用方法(注)(本冊P.299) ○ 使用方法(注)(本冊P.300) ○ 使用方法(注)(本冊P.300)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒	水産 (注)	
ハ ス モ ン ヨ ト ワ			発生初期	18		アアルコンフロアブル	1:外キジフェジト'	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:フルフェスロン	2,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
オ オ タ バ コ ガ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。	発生初期	15		マツチ乳剤	1:フルフェスロン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	15		カスケード乳剤	1:クロアフェジト'	4,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	18		マトリックフロアブル	1:外キジフェジト'	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	18		アアルコンフロアブル	1:エマタチン安息香酸塩	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	6		アアーム乳剤	1:レピタチン	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	6		アニキ乳剤	1:スピノサト'	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	5		ディアナSC	1:スピノサト'	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベシジト'	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	28		ブレバソフロアブル5	1:クロラントニリアプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	28		ヨーバルフロアブル	1:クロラントニリアプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	22A		トルネードエースDF	1:テトラエニリアプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	22A		ファイントリムADF	1:イトキサカルブ'	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	22A		グレーシア乳剤	1:イトキサカルブ'	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	30		プロフレアSC	1:フルキサタジト'	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	30		BT剤(参考資料P.15)参照	1:プロフアニト'	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			オ オ タ バ コ ガ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。	発生初期	28		ブレバソフロアブル5	1:クロラントニリアプロール	100倍	育苗期後半 ~定植当日	1回
発生初期	28+4A					ジュリボフロアブル	1:クロラントニリアプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)
発生初期	4A+28					アベイル粒剤	1:アセタジプロト2:シアントラニリアプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(本冊P.300)、回数注意
発生初期	28+4A					キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントニリアプロール2:シノテフラ	100倍	定植前日~定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)
発生初期	15					マツチ乳剤	1:フルフェスロン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	15					カスケード乳剤	1:フルフェスロン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	18					マトリックフロアブル	1:クロアフェジト'	1,000~2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	18					アアルコンフロアブル	1:外キジフェジト'	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	6					アアーム乳剤	1:エマタチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	6					アニキ乳剤	1:レピタチン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	5					ディアナSC	1:スピノサト'	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	28					フェニックス顆粒水和剤	1:スピノサト'	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	28					ブレバソフロアブル5	1:フルベシジト'	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	28					ヨーバルフロアブル	1:クロラントニリアプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	22A					トルネードエースDF	1:テトラエニリアプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	22A					ファイントリムADF	1:イトキサカルブ'	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
発生初期	30		グレーシア乳剤	1:イトキサカルブ'	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照			
発生初期	30		プロフレアSC	1:フルキサタジト'	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照			
発生初期	30		BT剤(参考資料P.15)参照	1:プロフアニト'	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	薬剤防除法					水産 (注)	注意事項
								濃度(使用量)	使用時期	本剤の使 用回数	人 毒			
ナ モ グ リ バ エ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 春と秋に発生が多い。 ○ シルバーボリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は成虫の飛来抑制に有効。 ○ マメ科、アブラナ科作物が周辺部にある場合は発生に注意。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 育苗中は寒冷紗等の設置により成虫の飛来を防止。 ○ シルバーボリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は成虫の飛来抑制に有効。 	発生前	4A 4A 4A 4A 4A 4A		アキララ粒剤5	1:チアキサム	15g/培土10	は種前	1回	普	×	○ 床土混和	
アルバリン粒剤	1:ジノテラン					15g/培土10	は種前	1回	普	△	○ 培土混和			
						スタークル粒剤	1:ジノテラン	15g/培土10	は種前	1回	普	△	○ 培土混和	
						アクアラ粒剤5	1:チアキサム	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布	
						アルバリン粒剤	1:ジノテラン	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布	
						スタークル粒剤	1:ジノテラン	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布	
						スピエース顆粒水和剤	1:スピノサド	500~1,000倍	定植前まで	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)	
						ブレバソフロアブル5	1:クロフエンプロアブル	100倍 ~定植当日	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)	
						ペリマクSC	1:ジノテランプロール	400倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(本冊P.300)、回数注意	
						ジェリボフロアブル	1:クロフエンプロール2:チアキサム	200倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)	
						アベイル粒剤	1:アセタミプリド2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ 1箱またはペーパー ポット1冊	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(本冊P.300)、回数注意	
						ヨーバルフロアブル	1:チトラニプロール	200倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)	
						モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	0.5g/株	定植前日 ~定植当日	1回	普	△	○ 株元散布	
						アルバリン顆粒水溶液	1:ジノテラン	50~100倍	定植前日~定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)	
						スタークル顆粒水溶液	1:ジノテラン	50~100倍	定植前日~定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)	
						キックオフ顆粒水和剤	1:クロフエンプロール2:ジノテラン	100倍	定植前日~定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.300)	
						ダントツ水溶液	1:クロフエンジン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
						アフアーム乳剤	1:エマメチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※		
						ブレバソフロアブル5	1:クロフエンプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
						ヨーバルフロアブル	1:チトラニプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					39	ハチハチフロアブル	1:トリアンピラト	2,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	×	○ 目に刺激痛、かぶれ注意	
						バダンSG水溶液	1:カルタップ	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×		
						グレーシア乳剤	1:フルキサタニド	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
カ ナ メ ク ツ ム ジ リ 類	<ul style="list-style-type: none"> ○ (発生の特徴) ○ 主に夜間に活動。 ○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 圃場周辺の雑草や、前作の残渣を早めに処分。 ○ 通風をよくする。 	発生初期	un 14 14		スラゴ	1:磷酸第二鉄	1~5g/m ²	発生時	-	普	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置	
										リーフガード顆粒水和剤	1:チオシタム	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内
						バダンSG水溶液	1:カルタップ	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×		
						銅剤及び混合剤(本冊P.317)参照 メタアルデヒド剤(参考資料P.29)参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	FRACコード				使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
			時期	IRACコード	FRACコード	FRACコード								
センチュウ類	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴) ○ 主要種はネグサレセンチュウ、ネコブセンチュウ類。													
アブラムシ類	病害虫の特徴 (発生の特徴) ○ 主要種はコボウヒゲナガアブラムシ。 ○ 初夏と秋に多発。		4A			アドマイヤー1粒剤	1:イシダクワアクト	4kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和	
		発生初期	4A		アドマイヤー1粒剤	1:イシダクワアクト	4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内		普	△	○ 株元散布	
			1B		オルトラン粒剤	1:アゼフェート	3~6kg/10a	収穫75日前まで	1回		普	○	○ 株元散布	
			1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000~2,000倍	収穫14日前まで	2回以内		普	△		
			1B		マラソン乳剤	1:マフン	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	5回以内		普	△		
			1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	3回以内		劇	×		
			1B		オルトラン水和剤	1:アゼフェート	1,000倍	収穫45日前まで	1回		普	△		
			4A		アドマイヤーフロアブル	1:イシダクワアクト	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内		劇	△		
			4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内		普	○		
ネキリムシ類	病害虫の特徴 (発生の特徴) ○ 主要種はカブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除き見られ、5~9月に異常発生することがある。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。	発生前	1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	9kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 播溝土壌混和	
			1B		ダイアジノン粒剤5	1:ダイシン	4kg/10a	は種時	1回		普	×	○ 全面土壌混和	
			3A		フォース粒剤	1:テフルリン	4kg/10a	は種時	1回		劇	×	○ 全面土壌混和 合ビレ(注)(本冊P.15)	
			1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	6kg/10a	は種時~出芽前	1回		普	△	○ 播溝土壌混和	
			3A		ガードベイトA	1:ベルメリン	3kg/10a	は種時~生育初期	5回以内		普	○※	○ 株元散布	
			1B		ネキリエースK	1:イキサチオン	3kg/10a	収穫14日前まで	4回以内		普	△	○ 土壌表面株元処理	
			1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	6kg/10a	収穫30日前まで	4回以内		普	△	○ 株元散布	
ヒヨウタンソウムシ類	病害虫の特徴 (発生の特徴) ○ ニンジン、ラッカセイ、ネギ、ダイコン、ホウレンソウ等多数の作物を加害。 ○ イネ科作物との輪作。 ○ キク科、タデ科雑草の除草を徹底。		発生前	1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	9kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 播溝土壌混和	
			1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	6kg/10a	は種時~出芽前	1回		普	△	○ 土壌表面散布	
			発生初期	1B		トクチオン粉剤	1:プロチオホス	6kg/10a	生育初期(但し収穫90日前まで)	4回以内		普	△	○ 散布
			1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	6kg/10a	収穫30日前まで	4回以内		普	△	○ 株元散布	
			3A		アグロスリン乳剤	1:ジベルメリン	2,000倍	収穫14日前まで	5回以内		劇	×		

土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照
○ 対抗植物の利用。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項
褐色腐敗病	<ul style="list-style-type: none"> 病斑はいも表面が楕円形に陥没し、黒褐変して奇形となる場合がある。 いもの腐敗が激しい場合は成育後期に下葉が早く黄化し枯れ上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> 種いもは健全なものを用いる。 窒素肥料の追肥多用で発生が助長されるので適正な肥培管理を行う。 連作で発生は拡大するので、作物残さや特に被害いもは圃場外で処理する。 排水不良地で多発するので、排水するところは排水対策を行う。 	種いもの消毒	29	フロンスイトSC	1:フルアジナム	500m ² /10a	植付前	1回	普	×	全面散布土壌混和(散布液量100～2000/10a)
葉淡病	<ul style="list-style-type: none"> (防除上のポイント) 発病初期の防除を徹底する。 	<ul style="list-style-type: none"> 支柱栽培を行う。 被害葉は集めて処分し支柱は消毒する。 	8 梅雨 中期 旬及び 以降	29 M7 M7 11 11 11 3	フロンスイトSC フロンスイト水和剤 ベルコートフロアブル ベルコート水和剤 ストロビーフロアブル アミスター20フロアブル マジヤーフロアブル オンリーワンフロアブル	1:フルアジナム 1:フルアジナム 1:ミノキサジナルベル酸塩 1:ミノキサジナルベル酸塩 1:ルンキムメチル 1:アノキニストロピン 1:ピコキニストロピン 1:デアコナゾール	2,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000～2,000倍 2,000～3,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	4回以内 4回以内 5回以内 5回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	×	<ul style="list-style-type: none"> 皮膚かぶれ注意 皮膚かぶれ注意 葉害等(注)(本冊P.299) 葉害等(注)(本冊P.299) 葉害等(注)(本冊P.299)
青かび病	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) いも内部まで暗褐色に腐敗する。 亀裂した病斑には青緑色のかびを生じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫時期が遅れないようにする。 収穫時になるべく傷をつけないようにする。 芋の貯蔵は湿度を保ち乾燥させない。 貯蔵前に湿度100%、20～25℃、10日間のキュアリング処理を行う。 	種いもの消毒	M5 M3 M3 M7 1 1 1+M3 11 11 3	ダコニール1000 ジマンダイセン水和剤 ベンコゼブ水和剤 ベルコートフロアブル トブジンM水和剤 ペンレート水和剤 ラピライト水和剤 アミスター20フロアブル マジヤーフロアブル オンリーワンフロアブル	1:TPN 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:ミノキサジナルベル酸塩 1:オプアネートメチル 1:ペンシル 1:オプアネートメチル2:マンネブ 1:アノキニストロピン 1:ピコキニストロピン 1:デアコナゾール	1,000倍 400～600倍 400 1,000倍 800倍 2,000倍 400倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫30日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	6回以内 4回以内 4回以内 5回以内 5回以内 3回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	×	<ul style="list-style-type: none"> 皮膚かぶれ注意
炭疽病	<ul style="list-style-type: none"> (防除上のポイント) 発病初期の防除を徹底する。 下葉や葉裏にも葉液が十分付着するようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 急激な肥切れを起こさないよう適度に追肥する。 	梅雨 前期 直前 直前	M5 M3 M3 M7 1 1 1+M3 11 11 3	ダコニール1000 ジマンダイセン水和剤 ベンコゼブ水和剤 ベルコートフロアブル トブジンM水和剤 ペンレート水和剤 ラピライト水和剤 アミスター20フロアブル マジヤーフロアブル オンリーワンフロアブル	1:TPN 1:マンゼブ 1:マンゼブ 1:ミノキサジナルベル酸塩 1:オプアネートメチル 1:ペンシル 1:オプアネートメチル2:マンネブ 1:アノキニストロピン 1:ピコキニストロピン 1:デアコナゾール	1,000倍 400～600倍 400 1,000倍 800倍 2,000倍 400倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫30日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	6回以内 4回以内 4回以内 5回以内 5回以内 3回以内 4回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	×	<ul style="list-style-type: none"> 皮膚かぶれ注意 葉害等(注)(本冊P.299) 葉害等(注)(本冊P.299)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒 (注)	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生主体はジャガイモモレガ ナガアブラムシ、ワタアブラム シ。	○ 雑草にも寄生し発生源とな るので、圃場内や周辺を除 草する。	萌 芽 期	4A		アクトラ粒剤5	1:チアトキサム	6kg/10a	萌芽期	1回	普	×	○ 株元散布
トウモロコシヨコ	(発生の特徴) ○ 4～10月に数回発生する。春 から秋に高温少雨であると多 発する。蛹で越冬する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。。		発 生 初 期	3A		アデイオン乳剤 トレボン乳剤 トレボンEW モスピラン顆粒水溶剤 モスピランSL液剤 アクトラ顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 コルト顆粒水和剤 ベネビアOD トランスフォームフロアブル オルトラン水和剤 ハチハチ乳剤	1:ペルメトリン 1:エトフェンブロックス 1:エトフェンブロックス 1:アセタミプリド 1:アセタミプリド 1:チアトキサム 1:クロアエジン 1:ピリオキサゲン 1:シントラニリアロール 1:フルホキサプロル 1:アセフェト 1:トフエビド	2,000～3,000倍 1,000倍 1,000倍 4,000倍 4,000倍 3,000倍 2,000～4,000倍 4,000倍 4,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫45日前まで 収穫前日まで	5回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 1回 2回以内	普 普 普 劇 劇 普 普 普 普 劇	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
ヤマトイモコガ	(発生の特徴) ○ 6～7月に発生が多い。 ○ 幼虫は老熟すると、葉裏や 支柱などで網目状のまゆを つくる。	○ 肥培管理を適正にし、過繁 茂にしない。 ○ 密植栽培を避け、風通しを 良くする。	発 生 初 期	1B 3A 3A		オルトラン水和剤 アデイオン乳剤 トレボン乳剤 BT剤(参考資料P.15)	1:アセフェト 1:ペルメトリン 1:エトフェンブロックス	1,000倍 2,000～3,000倍 1,000倍	収穫45日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	1回 5回以内 3回以内	普 普 普	△ ×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
ナガイモコガ	(発生の特徴) ○ 6～7月に発生が多い。 ○ 新芽と新葉を食害する。幼虫 は芽の中に潜んでいるので 見つけにくい。	○ 肥培管理を適正にし、過繁 茂にしない。	発 生 初 期	15 13 4A 28 28 28 3A 3A 21A		アタロン乳剤 コテツフロアブル モスピラン顆粒水溶剤 フェニックス顆粒水和剤 プレバソンフロアブル5 ベネビアOD スカウトフロアブル マブリックEW ハチハチ乳剤	1:クロルフルアスロン 1:クロルフルピル 1:アセタミプリド 1:フルベンジアド 1:クロラントリニリアロール 1:シントラニリアロール 1:トクロリン 1:フルハチネート 1:トルフェンブ	2,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 劇 劇 普 普 普 劇 劇	△ △※ △ △ △ △ △※ ×	○ IGR剤(注)(本冊P.15)
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9 ～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団 を寄生葉ごと摘除し、処分 する。	発 生 初 期	18 28 28 28		マトリックフロアブル フェニックス顆粒水和剤 プレバソンフロアブル5 ベネビアOD BT剤(参考資料P.15)	1:クロラントリニリアロール 1:フルベンジアド 1:クロラントリニリアロール 1:シントラニリアロール 1:トクロリン 1:フルハチネート 1:トルフェンブ	2,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍 4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普	○ △ △ △	○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 眼に刺激痛、皮膚かぶれ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法							水産 (注)	注意事項			
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期			本剤の 使用回数	人 毒	
シロコガネ 幼虫	(発生の特徴) ○ 成虫は6月中旬～7月下旬頃 が発生のピークとなる。幼虫 は7月頃から発生する。		植 付 時	4A		アドマイヤー1粒剤 ダントツ粒剤	1:イタクロブリン 1:クロチアエジン	4kg/10a 6～9kg/10a	植付時 植付時	1回 1回	普 普	△ △	○ 植溝土壌混和。登録はコガネ シ類 ○ 作黍土壌混和。登録はコガネ シ類	
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 高温乾燥時に発生。	○ 発芽前に畦畔雑草を除 草。	発 生 初 期	6 13 20D 25A		コロマイト乳剤 コテツフロアブル マイトローネフロアブル ダニサラバフロアブル	1:ミルベメクチン 1:クロルフェナヒル 1:ピフェナゼート 1:シフルトフェン	1,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 1回 2回以内	普 劇 普 普	△※ △※ △ ○	○ 登録はカンザワハダニ	
センチュウ類		○ 健全な種いもを使用。												

土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴)	耕種的防除法	薬剤防除法					水産 (注)	注意事項			
			IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)			使用時期	本剤の 使用回数	人 毒
ウイルス病	<ul style="list-style-type: none"> 主にBYMVによる。 虫媒(アブラムシ類)伝染。低率で種子伝染もする。 圃場内では散在して発生することが多い。 (防除上のポイント) アブラムシ類を防除する。 	<p>(耕種的防除法)</p> <ul style="list-style-type: none"> 無病種子を用いる。 初期の発病株を除去する。 アブラムシ類の飛来防止に努める。 圃場周辺の雑草を除去する。 										
苗立枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ピシウム属菌又はリゾグトニア属菌により被害を生じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 床土は無病土を使用する。 	<p>アブラムシ類の項(P.43)参照</p> <p>土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照</p>									
立枯病			<p>土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照</p>									
萎腐病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 本病は地際部が黒褐色に変色し、くもの巣状のかびを生じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発病株は早期に除去する。 	<p>発病前～発病初期</p>	32	タチガレン液剤	1:ヒトロキソイキサゾールカリウム	500倍	は種後及び生育期 但し、は種後1～2 か月後まで	3回以内	普	△	希釈液200ml/株を播種穴 又は株元に土壌灌注
褐斑病	<p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> 本病は、みかんのそばかす病の原因となるので、みかん圃の近くでは収穫後連やかに茎葉を取り除き処分する。 	<ul style="list-style-type: none"> 無病種子を用いる。 肥沃で排水良好な土地を選ぶ。 リン酸・カリ肥料を十分に施して強健に育てる。 	<p>発病前～発病初期</p>	14	リンレックス水和剤	1:トリクロホスメチル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	10/m ² の土壌灌注
うどんこ病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 収穫期に雨が多い年に発生が増加する。 (防除上のポイント) 発病後は、7～10日間隔で2～3回散布する。 	<ul style="list-style-type: none"> 被害残さを圃場内に残さないようにする。 発病した茎葉は速やかに除去する。 窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。 密植、株の過繁茂を避ける。 	<p>発病前</p>	1	トップジンM水和剤	1:チオアネートメチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			<p>発病初期</p>	M1	サンヨール トリフミン水和剤 フリー水和剤 カリグリーン ハーモメイト水溶剤	1:DBEDC 1:トリフルソール 1:シロブタニル 1:炭酸水素カリウム 1:炭酸水素ナトリウム	500倍 3,000～5,000倍 4,000～8,000倍 800～1,000倍 800～1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 5回以内 3回以内 — —	普 普 普 普 普	○ △ ○ ○ △	○ 高温時葉書注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)、多湿条件で発生する。 (防除上のポイント) ○ 輸送中等にも発病するので、出荷にあたっては被害葉は丁寧に取り除く。	○ 花卉・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避け風通しを良くする。	発病前	M1	サンヨール	1:DBEDC	500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	○ 高温時葉害注意	
			発病後	2	ロブラール水和剤	1:イプロブロン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
アブラムシ類	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ シルバーホリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ シルバーホリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前	10+1	ゲッター水和剤	1:エトフェンカルブ2:チオフアナートメチル	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 葉害等(注)(本冊P.299)	
			発病初期	10+1	ニマイバー水和剤	1:ジエトフェンカルブ2:ベニミル	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△		
カメムシ類			発生前	11	アミスター20フロアブル	1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	11	ファンダジスタ顆粒水和剤	1:ピルベシカルブ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	NC	スクレアラフロアブル	1:マンデスロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
			発病初期	NC	ハーモメイト水和剤	1:炭酸水素ナトリウム	800倍	収穫前日まで	—	普	△		
ダシラロメイイチガモジマ	(発生の特徴) ○ ふ化幼虫が葉内に食入し、子実を食害する。 ○ 年4世代程度発生する。		発生前	7	カリグリーン	1:炭酸水素ナトリウム	800倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	7	パレード20フロアブル	1:ピラジフルミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	1B	スマチオン乳剤	1:MEP	1,000~2,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	1B	ダイアジン乳剤	1:ダイアジン	1,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	劇	×		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	3A	アデイオン乳剤	1:ベルメリン	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	4A	モスピラン顆粒水溶液	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	4A	ダントツ水溶液	1:クロチアニジン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	4A	スタークル顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	4A	アルバリン顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	4A	マラン乳剤	1:マラン	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	4A	スマチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	4A	スタークル顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	4A	アルバリン顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	4A	アデイオン乳剤	1:ベルメリン	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	3A	トレボン乳剤	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×		○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
			発病初期	3A	トレボンEW	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	14	パダンSG水溶液	1:カルガップ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×		○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
			発病初期	4A	スタークル顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
ウラナニシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、花期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2~3回散布する。		発生前	4A	アルバリン顆粒水溶液	1:ジノアフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		○ 葉害等(注)(本冊P.299)
			発病初期	4A	スマチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項								
														水産 (注)							
クマメイメイ トウモロコシ ガ	○ 年1～2回発生し、ふ化幼虫が葉に食入して子実を加害する。 ○ 若齢幼虫期は集団で葉裏から食害し、白変葉になる。	○ 運作を避ける。	発 生 初 期	1B 1B 3A		スマチオン乳剤 マラソン乳剤 アデイオン乳剤	1:MEP 1:マラソン 1:ベルメリン	1,000～1,500倍 1,000倍 3,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	4回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ×	○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15)								
														3A	1:エトフェプロックス 1:エトフェプロックス 1:フルフェキサゾン 1:ピリダリル	1,000倍 1,000倍 4,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△ △ △ △	○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
														un	BT剤(参考資料P.15)参照						
ジンヨロイ トウモロコシ	(発生の特徴) ○ 若齢幼虫期は集団で葉裏から食害し、白変葉になる。 ○ 若齢幼虫期は集団で葉裏から食害し、白変葉になる。	○ 卵塊及びびふ化幼虫は捕殺する。	発 生 初 期	3A 3A 15 un		トレボン乳剤 トレボンEW カスケード乳剤 プレオフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:エトフェプロックス 1:エトフェプロックス 1:フルフェキサゾン 1:ピリダリル	1,000倍 1,000倍 4,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	× × △ △	○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照								
														15	カスケード乳剤	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
														18	マリックフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊及びびふ化幼虫は捕殺する。	発 生 初 期	5 28 un		コテツフロアブル ディアナSC プレバノンフロアブル5 プレオフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロルフェピル 1:スピネトラム 1:クロアクトラニリプロール 1:ピリダリル	2,000倍 2,500～5,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普	△ △ △ △	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照								
														5	ディアナSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
														28	プレバノンフロアブル5	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
ヨトウムシ			発 生 初 期	3A		トレボン乳剤	1:エトフェプロックス	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)								
アザミウマ	○ 圃場周辺の雑草にも寄生しているため除草する。		発 生 初 期	1B 3A 4A 4A 5		マラソン乳剤 アデイオン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 ディアナSC	1:マラソン 1:ベルメリン 1:アゼキアゾ 1:スピネトラム	2,000～3,000倍 3,000倍 4,000倍 2,500～5,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 劇 普	△ × △ △	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)								
														1B	マラソン乳剤	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
														3A	アデイオン乳剤	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
ハモグリバエ類			発 生 初 期	1B 3A 4A 4A 4A 4A		マラソン乳剤 アデイオン乳剤 スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒剤 アルバリン顆粒剤	1:マラソン 1:ベルメリン 1:ジノアラン 1:ジノアラン 1:ジノアラン 1:ジノアラン	1,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 9kg/10a 9kg/10a	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 生育期但し、収穫開始14日前まで 生育期但し、収穫開始14日前まで	3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 1回 1回	普 普 普 普 普	△ × △ △ △	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)								
														1B	マラソン乳剤	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
														3A	アデイオン乳剤	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
ナモグリバエ			発 生 初 期	5 28 3A 14 21A		ディアナSC プレバノンフロアブル5 スカーフトフロアブル パダンSG水溶剤 ハチハチフロアブル	1:スピネトラム 1:クロアクトラニリプロール 1:トクロメリン 1:カルタップ 1:トルフェンピラト	2,500～5,000倍 2,000倍 1,500倍 1,500～3,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 劇 劇 劇	△ △ △ × ×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 合ピレ(注)(本冊P.15)								
														5	ディアナSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
														28	プレバノンフロアブル5	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
シロカネム		○ 過度な未熟堆肥の施用は避ける。	発 生 初 期	1B		マラソン乳剤	1:マラソン	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△									
ハダニ類			発 生 初 期	21A 13		ダニトロンフロアブル コテツフロアブル	1:フェピロキサメト 1:クロルフェピル	1,000～2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 2回以内	普 劇	× △※	○ 殺卵効果主体								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
病苗立枯		○床土は無病土を使用する。											
いもち病	(発生の特徴) ○過繁茂の状態で降雨が続くと発生が多くなる。	○密植を避け、風通しをよくする。 ○病葉を摘みとり処分する。	発病初期	11+4 1		ユニフォーム粒剤 ベンレート水和剤	1:アゾキシストロビン2:メダキシホルム1:ベニミル	18kg/10a 1,000倍	収穫30日前まで 収穫21日前まで	3回以内 2回以内	普 普	△ △	
紋枯病	(発生の特徴) ○病勢が進むと根茎も侵されることがある。	○無病種子を用いる。 ○排水を良くする。 ○病株を除去する。	発病初期	U18 7		バリダシン液剤5 モンカットプロアブル40	1:バリダマイシン 1:フルトラニル	800倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫3日前まで	4回以内 6回以内	普 普	△ △	○トマト、きくへの飛散注意。
根茎腐敗病	(発生の特徴) ○本病は腐敗するが悪臭を伴うことはない。 (防除上のポイント) ○発病すると薬剤の効果は著しく劣る。	○排水を良くする。 ○無病圃場から採種したものを植え付ける。	本畑消毒 前駆付	M4 21 11+4 28 21 M4		オーンサイド水和剤80 ランマンプロアブル ユニフォーム粒剤 プレビクールN液剤 オラクル顆粒水和剤 オーンサイド水和剤80	1:キアブタン 1:ジブアブアミド 1:アゾキシストロビン2:メダキシホルム 1:プロパモキサカルブ塩酸塩 1:アミルプロム 1:キアブタン	塊茎重量の2% 500~1,000倍 18kg/10a 400~600倍 2,000倍 400倍	植え付け前 生育期(但し収穫30日前まで) 収穫30日前まで 生育期(但し、収穫30日前まで) 生育期(但し、収穫3日前まで) 収穫30日前まで	1回 3回以内 3回以内 5回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普	× ○ △ ○ △※ ×	○塊茎粉衣 ○30/m ² 土壌灌注 ○定植前作糸土壌混和又は生育期土壌表面散布 ○30/m ² 土壌灌注 ○10/m ² 土壌灌注 ○30/m ² 灌注
アノメイガ		桑園周辺では、ほとんどの薬剤が蚕に影響があるので注意する。	生 育 期	1B 3A 14 22A 22A		オルトラン水和剤 スカウトフロアブル バダシSG水溶性 トルネードエースDF ファインドリムDF	1:アセフェート 1:トロメリン 1:カルグップ 1:イントキサカルブ 1:イントキサカルブ	1,000倍 1,500倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍	収穫45日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 5回以内 5回以内 3回以内 3回以内	普 劇 劇 普 普	△ △※ × ○ ○	○合ピレ(注)(本冊P.15)
ハスモンヨトウ		○卵塊及びふ化幼虫は捕殺する。	発 生 初 期	18 28 28 22A 22A 22B 13 un 30		ロムダンフロアブル フェニックス顆粒水和剤 プレバシオンフロアブル5 トルネードエースDF ファインドリムDF アクセルフロアブル コテツフロアブル プレオフロアブル グレース乳剤	1:テフプロエント 1:フルベント 1:クロソトリエリプロール 1:イントキサカルブ 1:イントキサカルブ 1:メタルミン 1:クロルフェニル 1:ピリダリル 1:フルキサメタクト	2,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000~3,000倍 6~9kg/10a	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普	○ △ △ ○ ○ ○ △※ △ △ △	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○主要種はカブラヤガ。 ○萌芽初期に茎の地際を食害する。	○被害株の株元を掘り起こし幼虫を捕殺する。 ○高畦にして移動を防ぐ。	萌 芽 期	3A 3A		フォース粒剤 ガードベイトA	1:テフプロリン 1:ベレルトリン	3kg/10a	萌芽期 定植時~発芽期(但し、収穫120日前まで)	1回 4回以内	劇 普	× ○※	○株元散布 合ピレ(注)(本冊P.15) ○株元散布 合ピレ(注)(本冊P.15)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 毒(注)	注意事項
青枯病	○ 赤しそでは刈玉を通して収穫時に二次伝染する。 ○ 葉裏に黄色の円形病斑を生じ、のちに表皮が破れて黄色の夏胞子を生じる。	○ 連作しない。 ○ 発病株は直ちに抜きとり圃場内に放置しない。 ○ 排水を良くする。 ○ 耐病性品種を栽培する。 ○ 健全苗を使用する。 ○ 病害を発生初期に摘み取り処分する。 ○ 連作は避ける。 ○ 養素肥料の偏用・肥切れさせないよう適正な施肥管理を行う。 ○ 排水を良くし、多湿にしない。	3		トリフミン水和剤	1:17フルミゾール	5,000倍	収穫開始 10日前まで	3回以内	普	△	
さび病	(発生の特徴) ○ 葉裏に黄色の円形病斑を生じ、のちに表皮が破れて黄色の夏胞子を生じる。 (防除上のポイント) ○ 早期発見に努め、発生初期に重点的に防除する。	○ 健全種子を用いる。 ○ 被害株は早期に除去する。	3		サブロー乳剤	1:1トリホリン	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
病そうか	(発生の特徴) ○ 5～7月の多雨期に発生が多い。	○ 健全種子を用いる。 ○ 被害株は早期に除去する。	M5		ダコニール1000	1:1TFN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	○ 株元散布(150%/10a)かぶれ注意
斑点病	(発生の特徴) ○ バック内で円形～不整形の黒色斑点症状となる(市場病害)。	○ 健全種子を用いる。 ○ 被害株は早期に除去する。	11	7	ストロビーフロアブル アフェットフロアブル	1:1ルソキウムメチル 1:1ベンチオキサト	4,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫3日前まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	○ 葉害等(注)(本冊P.299) ○ 銅剤は葉に薬液がかかからないよう株元へ散布。
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ エゴマアブラムシ、フタアブラムシなどが寄生する。 ○ 寄生葉では葉の縮れや巻き込みなどの奇形が生じる。 (防除上のポイント) ○ 発生初期に葉裏を重点的に丁寧に散布する。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	3A	3A	アゼイオン乳剤 アグロスリン乳剤	1:1ベルメリン 1:1シベルメリン	4,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで	2回以内 1回	普 劇	× ×	○ 合ビレ(注)(本冊P.15) ○ 合ビレ(注)(本冊P.15)
ハダニ類	(防除上のポイント) ○ 同一系統の薬剤の連用を避ける。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しないことを徹底する。 ○ 寄生を受けた雑草の刈払いなどは、ハダニの離脱や移動も考慮し適切に実施する。	21A	21A	ダニトロンフロアブル サンマイトフロアブル	1:17エビトキシメート 1:1ピリダベン	2,000倍 2,000倍	収穫28日前まで 収穫21日前まで	1回 1回	普 劇	× ×	○ 登録はカンザワハダニ

病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法							水産 (注)	注意事項	
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期			本剤の 使用回数
ハ ス モ ン ヨ ト ウ	(発生の特徵) ○ 年5～6回の発生、被害は9 ～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。 8月中下旬の防除が重要で ある。	○ 卵塊や幼虫は見つけ次第 除去する。	発 生 初 期	15 18 15 6 28 28 un		カステード乳剤 マトリックフロアブル カウンタール剤 アファーム乳剤 フェニックス顆粒水和剤 プレバソフロアブル5 プレオフロアブル	1:フルフェキサゾン 1:クロマフェノト 1:ノバルロン 1:エマクチン安息香酸塩 1:フルヘンジンアミド 1:クロフトロニリアロール 1:ピリタリル	4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
類 ア ザ ミ ウ マ	(発生の特徵) ○ ミナミキイロアザミウマ、モトジ ロアザミウマなどが発生す る。		発 生 初 期	3A 5 23 14 30		アデイオン乳剤 スピエース顆粒水和剤 モベントフロアブル パダンSG水溶剤 グレースシア乳剤	1:ペルメリン 1:ズノド 1:ズノド 1:カルタップ 1:フルキサミド	4,000倍 10,000倍 2,000倍 3,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで	2回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 劇 普	○ 合ビレ(注)(本冊P.15) ○ 葉害等(注)(本冊P.299)
土壌病害虫防除法の項(本冊P.301)参照												

病名	病徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 水産 毒(注)	注意事項
腐病	<ul style="list-style-type: none"> 病害虫の特徴 防除上のポイント等 (発生の特徴) ○ 地際部が軟化、腐敗し、腐敗部からは悪臭を生じる。 ○ 後作のナス科、アブラナ科、ネギ類などにも発生する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌伝染するので、健全なほ場、用土を使用する。 ○ 連作は発病を助長するので、輪作を行う。 ○ 資材も伝染源となる。再利用の場合、洗浄・消毒を徹底する。 ○ 傷口から侵入するので、傷を生じないように管理作業を心がける。 	31			スターナ水和剤 銅剤及び混合剤(本冊P.317)、微生物農薬(参考資料P.20)	1:オキシニエツ酸	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○ 葉害等(注)(本冊P.299)
根こぶ病	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) ○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 根こぶが腐敗すると大量の休眠胞子が放出される。 ○ 休眠胞子は表土15cmまでに多い。 ○ 本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間である。 (防除上のポイント) ○ 薬剤を土壌混和する場合は、土壌が乾燥時実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 床土は無病土を使用する。 ○ 多発での作付を避ける。 ○ 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 ○ 排水を良くし高畝とする。 ○ アブラナ科雑草(タネツケバナ、ナズナ等)を除草する。 ○ 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し適正に処分する。 ○ おとり作物の葉だいこん等を間作する。 ○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する(排水対策必須)。 	21			オラクル顆粒水和剤	1:アミスターフロム	200～300g/10a	は種前又は定植前	2回以内	普	○ 1000の水で希釈し全面散布後土壌混和
白さび病		<ul style="list-style-type: none"> ○ アブラナ科雑草にも発病するので除草を徹底する。 ○ 湿地を避け排水対策を行う。 ○ 窒素過多を避ける。 ○ トンネル、ハウス栽培では換気に努める。 ○ 適切な栽植密度とする。 ○ 被害株は圃場外で適切に処分する。 	11+4			ユニフォーム粒剤	1:アブキストロビン2:タガキシルM	9kg/10a	定植前	1回	普	○ 全面土壌混和
			定植時									
			生育期									
				21		ランマンフロアブル	1:ジグザグアクト	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○
				21		ライメイフロアブル	1:アミスターフロム	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△
				11		アミスター20フロアブル	1:アブキストロビン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△
				U17		ピシロックフロアブル	1:ピカルブトラゾクス	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシが発生する。 モモアカアブラムシは春と秋、ダイコンアブラムシは春、ニセダイコンアブラムシは秋に発生が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 シルバークロによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。 	発生前	4A 4A 4A 4A 4A 4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ダントツ粒剤 モスピン粒剤 アクタラ粒剤5 ダントツ粒剤	1:ジノアリン 1:ジノアリン 1:クロチアニジン 1:アセチアミプリド 1:チアトキサム 1:クロチアニジン	6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 0.5g/株 6kg/10a 6kg/10a	は種時 は種時 は種時 定植前日 ～定植当日 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ × △	<ul style="list-style-type: none"> 播溝土壌混和 播溝土壌混和 播溝処理土壌混和 株元散布 作条混和 作条処理土壌混和
ミコシラ		<ul style="list-style-type: none"> 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 施設栽培では、近紫外線カットフィルム被覆が侵入抑制に有効である。 施設栽培では、成虫の侵入を防止するため、開口部をネット被覆する(1mm目以下(0.6mm目以下が望ましい))。 施設栽培では、開口部近くに黄色粘着トラップを設置すると侵入抑制に有効である。 作付予定地では予め除草し前作も早急に処分する。 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 	発生初期	3A 3A 3A 4A 4A 4A 4A 4A 4C		アグロスリン乳剤 スカウト乳剤 スカウトフロアブル モスピン顆粒水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 トランスフオームフロアブル	1:シベルトリン 1:トロトリン 1:トロトリン 1:アセチアミプリド 1:チアトキサム 1:シノチアリン 1:ジノアリン 1:クロチアニジン 1:ホルネキサロル	2,000倍 1,500倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍 3,000倍 3,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 1回 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内	劇 劇 劇 普 普 普 普 普	× △※ △※ △ △ △ △ △ △ ○	<ul style="list-style-type: none"> 合ビレ(注)(本冊P.15) 合ビレ(注)(本冊P.15)
ネキリムシ類	<ul style="list-style-type: none"> 主要種は、カブラヤガ、タマヤガ 被害は越冬期を除いていつでも見られるが、5～9月には異常発生することがある。 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 育苗中は寒冷紗などの被覆によって成虫の飛来と産卵を防止する。 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 	発生前	TB 3A		ダイアジン粒剤5 フォース粒剤	1:ダイアジン 1:アトルリン	6kg/10a 4kg/10a	は種時又は定植時 は種前	1回 1回	普 劇	× ×	<ul style="list-style-type: none"> 全面土壌混和 全面土壌混和 合ビレ(注)(本冊P.15)
アオムシ	<ul style="list-style-type: none"> 標準名称(モンシロチョウ) 春～初夏及び10～11月に被害が多い。 若齢幼虫期に防除する。 	<ul style="list-style-type: none"> 育苗中は寒冷紗などの被覆によって成虫の飛来と産卵を防止する。 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 	発生初期	4A 3A 6 5 5 28		モスピン粒剤 アグロスリン乳剤 アファーム乳剤 スピノエース顆粒水和剤 デイアトSC ベリマークSC	1:アセチアミプリド 1:シベルトリン 1:エマカチン安息香酸塩 1:スピノアト 1:スピノトラム 1:シノアトリアアロール	0.5g/株 2,000倍 1,000～2,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍 4,000倍	定植前日 ～定植当日 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	1回 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 1回	普 劇 普 普 普 普	△ × △※ △ △ △	<ul style="list-style-type: none"> 株元散布 合ビレ(注)(本冊P.15) 0.2ℓ/m²株元灌水、登録は非結球アブラナ科葉菜類

病虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法							注意事項	
			時期	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数		人水産 毒(注)
ヨトウムシ		<ul style="list-style-type: none"> 育苗中は寒冷紗などの被覆によって成虫の飛来と産卵を防止する。 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 	発生初期	18	マトリックフロアブル スピノエース顆粒水和剤 ダイアナSC BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロフェノト 1:スピノト 1:スピネラム	2,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
ハスモンヨトウ	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。 	<ul style="list-style-type: none"> 育苗中は寒冷紗などの被覆によって成虫の飛来と産卵を防止する。 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し処分する。 	発生初期	5	ダイアナSC BT剤(参考資料P.15)参照	1:スピネラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	
コナガ	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) ○ 春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○ 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。 ○ ジアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。 ○ 有効な薬剤を長持ちさせるために、薬剤の諸性質等を考え効果的な防除を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 育苗中は寒冷紗などの被覆によって成虫の飛来と産卵を防止する。 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 	発生前	4A	モスピラン粒剤	1:アゼキサブト	0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	○ 株元散布
ハイイメダラノメイカ	<ul style="list-style-type: none"> (発生の特徴) ○ 夏期に高温少雨で発生が多くなる。 ○ 別名:ダイコンシンクイムシ。 	<ul style="list-style-type: none"> 育苗中は寒冷紗などの被覆によって成虫の飛来と産卵を防止する。 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 ○ 芯を食害された株は、回復の目込みはなく、葉もかかりにくいので圃場外で適切に処分する。 	発生初期	5	BT剤(参考資料P.15)参照 スピノエース顆粒水和剤 ダイアナSC BT剤(参考資料P.15)参照	1:スピノト 1:スピネラム	2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○ 0.2ml/m ² 株元灌水

病害虫名		病害虫の特徵 防除上のポイント等		耕種的防除法		薬剤防除法									
時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項					
キ ス ジ ノ シ ハ ム シ	発 生 前	1B	ダイアジン粒剤5	1:ダイジン	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○全面土壌混和					
	生 前	4A	スタークル粒剤	1:ジノフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和					
ハ モ グ リ バ エ 類	4A		アルパリン粒剤	1:ジノフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和					
	4A		フォース粒剤	1:テアルトン	4kg/10a	は種前	1回	劇	×	○全面土壌混和 合ピレ注意事項(P.15)参照					
マ ム ハ モ グ リ バ エ	4A		アルパリン粒剤	1:ジノフラン	6kg/10a	定植時	1回	普	△	○土壌混和					
	4A		スタークル粒剤	1:ジノフラン	6kg/10a	定植時	1回	普	△	○土壌混和					
ア ザ ミ ウ マ 類	4A		モスヒラン顆粒水溶剤	1:モヒラン	4,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	△						
	4A		アルパリン顆粒水溶剤	1:ジノフラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△						
ア ザ ミ ウ マ 類	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノフラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△						
	22B		アクセルフロアブル	1:タフルミン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○						
ア ザ ミ ウ マ 類	14		パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×						
	4A		アクトラ粒剤5	1:チノキサム	6kg/10a	定植時	1回	普	×	○作条混和					
ア ザ ミ ウ マ 類	17		トリガード液剤	1:シロミン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照					
	5		スピノエース顆粒水溶剤	1:スピノット	2,500~5,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△						
ア ザ ミ ウ マ 類	5		デアイナSC	1:スピノラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
	218+6+		アファームエクスセラ顆粒水和剤	1:エマクチン安息香酸塩2:ルフェエロン	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※						
ア ザ ミ ウ マ 類	15		ダントツ水溶剤	1:クロチアニン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△						
	15		カスケード乳剤	1:フルアエノスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照					
ア ザ ミ ウ マ 類	5		スピノエース顆粒水溶剤	1:スピノット	2,500~5,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△						
	5		デアイナSC	1:スピノラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
トビアアブシムシ	○ 菌核の形で土壌中に残存し、作物が播種されると適当な温度と土壌水分で活動をはじめ、地際部の胚軸を侵す。	○ 土壌中に未分解の有機物があると病原菌が増殖して多発しやすいので、腐熟するのを待って播種する。	発生前		14 11+4 M4	リゾレックス水和剤 ユニフォーム粒剤 オーソサイド水和剤80	1:トリクロロホルム 1:アゾキシストロビン2:タラキニルM 1:キアブタン	1,000倍 9~18kg/10a 800倍	は種時及び子葉展開時 は種前 は種後から2~3葉期まで	2回以内 1回 2回以内	普 普 普	△ △ ×	○ 植穴土壌灌水(10/㎡)150m0/穴 ○ 全面土壌混和 ○ 2L/㎡灌水
葉枯細菌病	(発生の特徴) ○ 春から梅雨期までの生育初期から収穫期に発生し、梅雨明け以降の収穫期には発生は少ない。	○ 発病葉が土壌中に残り第1次伝染源となる。	発生初期		24+M1 24+M1	カスミンポルド一 カップパーシンス水和剤	1:カスファミン2:塩基性塩化銅 1:カスファミン2:塩基性塩化銅	1,000倍 1,000倍	収穫開始7日前まで 収穫開始7日前まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △	
葉すす病	(発生の特徴) ○ 第1次伝染源は発病葉で、分生子の飛散により伝播する。病原菌の生育適温は28℃。	○ 発病葉は早めに適用し、圃場に残さない。	発生初期		1 M5 1 11	トップジンM水和剤 ダコニール1000 ベンレート水和剤 ファンタジスタ顆粒水和剤	1:チオアネートメタル 1:TPN 1:ベンシル 1:ピリベンカルブ	1,500倍 1,000倍 3,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 5回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普	△ × △ △	
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 収穫期に雨が多い年に発生が増加する。	○ 被害残さば場内に残さないようにする。 ○ 窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。	発生初期	un	M10 3 11 7	モレスタン水和剤 トリフミン水和剤 アミスター20フロアブル アフェットフロアブル	1:キキサル系 1:トリフルシール 1:アゾキシストロビン 1:ベンチオゼブ	3,000倍 5,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普	△ △ △ △	
疫病	(発生の特徴) ○ 罹病残さが伝染源。連続降雨で多発。生育適温30℃。	○ 高畝にして排水をよくする。罹病株を除去する。	発生初期		11+4	ユニフォーム粒剤	1:アゾキシストロビン2:タラキニルM	9kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 株元散布
黒斑病	(発生の特徴) ○ 病原菌は空気中に浮遊する常在菌である。	○ 収穫後長時間高温多湿条件下に放置しない。雨の日の収穫は避ける。	初発期		2 3	ロブラール水和剤 トリフミン水和剤	1:イプロンゾ 1:トリフルシール	2,000倍 5,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △	
びっぴり病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)多湿条件下で発生が多い。	○ 密植を避け風通しを良くする。	発生初期		2 7	ロブラール水和剤 アフェットフロアブル	1:イプロンゾ 1:ベンチオゼブ	2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はワタアブラムシ、稀にモモアカアブラムシ、ハスクビレアブラムシが発生することがある。	○ 圃場周辺にソルゴーなど天敵昆虫を植えることで天敵昆虫の発生も期待できる。	発生初期		3A 3A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A	アデオオン乳剤 トレボン乳剤 モスビラン顆粒水溶剤 ダント水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アルバリン粒剤	1:ベルトリン 1:エトフェプロックス 1:アセミプリド 1:クロチアニン 1:チアマトキム 1:ジノアラン 1:ジノアラン 1:ジノアラン	2,000倍 1,000倍 4,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 9kg/10a	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 生育期(但し収穫開始14日前まで) 生育期(但し収穫開始14日前まで)	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 1回 1回	普 普 劇 普 普 普 普 普 普	× × △ △ △ △ △ △ △	○ 合ビレ(注)本冊P.15) ○ 合ビレ(注)本冊P.15)
					4A 9B 29	スタークル粒剤 チェス顆粒水和剤 ウアラDF 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	1:ジノアラン 1:ピトロジン 1:プロニカト	9kg/10a 6,000倍 2,000倍	生育期(但し収穫開始14日前まで) 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 3回以内 3回以内	普 普 普	△ ○ ○	○ 株元散布 ○ 株元散布

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
ハスモンヨトウ	○卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し処分する。	○卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し処分する。	発生初期	15 18 28 13 un 30		アタプロン乳剤 マトリックフロアブル フェニックス顆粒水和剤 コテツプロアブル プレオフロアブル グレーシア乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロルフルアスロン 1:クロルフェナゾト 1:フルベンジアゾト 1:クロルフェアヒル 1:ピリダリル 1:フルキキマダト	2,000倍 2,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 劇 普 普	△ ○ △ △※ △ △	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
オオタバコガ	○孔の開いた果実は早期に摘果し、果実内に食入している幼虫を捕殺してから処分する。	○孔の開いた果実は早期に摘果し、果実内に食入している幼虫を捕殺してから処分する。	発生初期	15 13 6 un 30		アタプロン乳剤 コテツプロアブル アファーム乳剤 プレオフロアブル グレーシア乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロルフルアスロン 1:クロルフェアヒル 1:エマクチン安息香酸塩 1:ピリダリル 1:フルキキマダト	2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 劇 普 普 普	△ △※ △※ △ △	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
カメムシ類			発生初期	3A 3A		アデイオン乳剤 トレボン乳剤	1:ベルメリン 1:エトフェンプロックス	2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	普 普	× ×	○合ピレ(注)(本冊P.15) ○合ピレ(注)(本冊P.15)
ハダニ類			発生初期	un	M10	モレスタン水和剤 気門封鎖型薬剤(参考資料P.30)参照	1:キキサル系	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
アザミウマ類	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場周辺を除草する。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場周辺を除草する。	発生初期			生物農薬(参考資料P.20)参照							
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○萌芽初期に茎の地際を食害する。	○被害株の株元を掘り起こし幼虫を捕殺する。 ○高畝にして移動を防ぐ。	発生前	1B 3A		ダイアジン粒剤5 ガードベイトA	1:ダイアジン 1:ベルメリン	6kg/10a 3kg/10a	収穫開始30日前まで は種時～生育初期	2回以内 3回以内	普 普	× ○※	○全面散布 ○合ピレ(注)(本冊P.15)

病害虫名		耕種的防除法		薬剤防除法									
病害虫名	病害虫の特徴 防除法のポイント等	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
萎凋病	(発生の特徴) ○被害株の残渣が次作への伝染源となる。	発生前			土壌病害虫防除法の項(P.301)参照								
炭疽病	(発生の特徴) ○発病適温は23℃程度で、多湿時に発生しやすい。	発初期			ストロビーフロアブル アミスター20フロアブル スレシアフロアブル	1:ケルキシムサル 1:アノキシムロビン 1:マンテクトロビン	3,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ○		
アブラムシ類	(発生の特徴) ○発生の主体はワタアブラムシ、モモアカイアブラムシ。	発生前	4A		アクトラ粒剤5 ダント粒剤 ベストガード粒剤	1:チアトキサム 1:クロチアニン 1:ニテピラム	6kg/10a 6kg/10a 9kg/10a	は種時は種時 は種時 定植時	1回 1回 1回	普 普 普	× △ △	○作業混和 ○植溝処理土壌混和 ○植溝処理土壌混和	
		発初期	4A		モスビラン顆粒水溶剤 ベストガード粒剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アクトラ顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 ウアラDF	1:アセチアクト 1:ニテピラム 1:シノアブラン 1:シノアブラン 1:チアトキサム 1:クロチアニン 1:プロニカスト	8,000倍 9kg/10a 3,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000~4,000倍 4,000倍	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	2回以内 1回 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内	劇 普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ ○	○生育期株元処理	
トウモロコシヨ	(防除法のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	発初期	15 13 5 un		カスケード乳剤 コテツフロアブル ディエナSC プレオフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照 アブアーム乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:フルフェキサゾン 1:クロルフェチル 1:スピネトラム 1:ピリタリル	2,000~4,000倍 2,000倍 2,500~5,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 劇 普 普	△ △※ △ △	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照	
シロイチモシヨ	(防除法のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	発初期	6		アブアーム乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:エマクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※		
シヨウトウ	(防除法のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	発初期	15		カスケード乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:フルフェキサゾン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照	
コナジラミ類		発生前	4A		ベストガード粒剤	1:ニテピラム	9kg/10a	定植時	1回	普	△	○植溝処理土壌混和	
		発初期	4A		ベストガード粒剤	1:ニテピラム	9kg/10a	収穫3日前まで	1回	普	△	○生育期株元処理	

薬剤防除法													
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ハモゾグリバエ類		○被害を受けた収穫残渣は発生源となるので適切に処理する。	発生前	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	4A		アルバリン粒剤	1:ジ/テフラン	9kg/10a	は種時	1回	普	△	
			発生初期	4A		スタークル粒剤	1:ジ/テフラン	9kg/10a	定植時	1回	普	△	
			発生初期	4A		スタークル粒剤	1:ジ/テフラン	9kg/10a	定植時	1回	普	△	
マハモゾグリバエ			発生前	17		トリガード液剤	1:シロマジン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
			発生初期	6		アフアーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
			発生初期	5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
マアザミウ		○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場周辺を除草する。	発生前	4A		ベストガード粒剤	1:ニフェピラム	9kg/10a	定植時	1回	普	△	○植溝処理土壌混和
			発生初期	4A		ベストガード粒剤	1:ニフェピラム	9kg/10a	収穫8日前まで	1回	普	△	
			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサゾン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
シネキリム		○周辺雑草は発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生前	1B 3A		カルボス微粒剤F ガードベイトA	1:イキチオン 1:ベルトリン	6kg/10a 3kg/10a	定植時 生育初期	1回 2回以内	劇 普	△ ○※	○作条処理土壌混和 ○合ピレ(注)(本冊P.15)

病害虫名	病害虫の特徵 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
根 こ ぶ 病	<ul style="list-style-type: none"> ○(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。 ○本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。 	<ul style="list-style-type: none"> ○多発圃場での作付を避ける。 ○石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。 	発生初期	36 29 21 21	ネビジン粉剤 ネビジン粉剤 フロキサト粉剤 オラクル顆粒水和剤 オラクル粉剤	1:フルメチアト 1:フルメチアト 1:フルメチアト 1:フルメチアト 1:フルメチアト	20～30kg/10a 20kg/10a 30kg/10a 200～300g/10a 20～30kg/10a	は種又は定植前 は種又は定植前 は種前 は種前又は定植前 は種前又は定植前	1回 1回 1回 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普	○※ ○※ ○※ ○※ ○※	○全面土壌混和 ○作条土壌混和 ○全面土壌混和 ○100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和 ○全面土壌混和	
白 さ び 病	<ul style="list-style-type: none"> ○(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○湿地を避け排水を良くする。 ○発病葉を除去し、適正に処理する。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。 	発生初期	11+4 21 21 11 U17	ユニフォーム粒剤 ランマンフロアブル ライメイフロアブル アミスター20フロアブル ピシロックフロアブル	1:アゼキストロビン2:メタキソルム 1:ジメチアト 1:アミスター 1:アゼキストロビン 1:ピカリアクトラゾクス	9kg/10a 2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍	は種前 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普	△ ○ △ △ △	○全面土壌混和	
ア ブ ラ ム シ 類	<ul style="list-style-type: none"> ○(発生の特徴) ○モモアカアブラムシ、ニセダイコンアブラムシが発生する。 ○モモアカアブラムシは春、ニセダイコンアブラムシは秋に発生が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○シルバーボリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。 	発生前 発生初期	1B 4A 4A 4A 4A 4A 3A 4A 4A 4A 4A 4A 4C	オストラン粒剤 モスビラン粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アクタラ粒剤5 ダントツ粒剤 アグロスリン乳剤 モスビラン顆粒水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 トランスフオームフロアブル	1:アゼキストロビン 1:アゼキストロビン 1:ジメチアト 1:ジメチアト 1:アチアトキヤム 1:クロチアニジン 1:シベルメリン 1:アゼキストロビン 1:チアトキヤム 1:ジメチアト 1:ジメチアト 1:アチアトキヤム 1:クロチアニジン 1:スルホキサフロル	6kg/10a 3kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 2,000倍 4,000倍 2,000倍 3,000倍 3,000倍 2,000～4000倍 2,000倍	は種前 は種時 は種時 は種時 は種時 は種時 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで	1回 1回 1回 1回 1回 1回 2回以内 1回 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 劇 劇 普 普 普 普 普	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○作条混和 ○播溝処理土壌混和 ○合ピレ(注)(本冊P.15)	
ア オ ム シ	<ul style="list-style-type: none"> ○(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春～初夏及び10～11月に被害が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 	発生初期	13 15 5 5	コテツフロアブル カスケード乳剤 デアノSC スピノエース顆粒水和剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:クロルフェチル 1:フルフェキサズロン 1:スピノトラム 1:スピノト	2,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで	1回 2回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普 普	△※ △ △ △	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照	
コ ナ カ	<ul style="list-style-type: none"> ○(発生の特徴) ○春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○殺虫剤抵抗性が極めて発達しやむを得ず、同一系統の薬剤を連用しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分、発生放任圃場を作らない。 ○施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。 	発生前 発生初期	4A 6 15 13 5 un 22B	アブナーム乳剤 カスケード乳剤 コテツフロアブル スピノエース顆粒水和剤 デアノSC プレフロアブル アケセルフロアブル BT剤(参考資料P.15)参照	1:アゼキストロビン 1:エマメチン安息香酸塩 1:フルフェキサズロン 1:クロルフェチル 1:スピノト 1:スピノトラム 1:アチアトキヤム 1:アチアトキヤム	2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍 1,000倍	は種時 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 2回以内 2回以内 1回 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 劇 普 普 普 普	△ △※ △ △ △ △ △ ○	○播溝土壌混和 ○IGR剤(注)(本冊P.15)参照	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
トウモロコシ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。		発生初期	18 5 5		マトリックフロアブル スピノエース顆粒水和剤 デアナナSC	1:クロマフェノジド 1:スピノサト 1:スピノネトラム	2,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	○ △ △	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
メハライイガ	(発生の特徴) ○夏期の高温少雨で多発する。 ○幼虫は生長点付近を食害する。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生初期	5 5		スピノエース顆粒水和剤 デアナナSC	1:スピノサト 1:スピノネトラム	2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	
ハモグリバエ類		○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分、発生放任圃場を作らない。	発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	2,500～5,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
マメハモグリバエ			発生初期	15		カステキード乳剤	1:フルフェキサソロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
マアザミウ		○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場周辺を除草する。	発生初期	5 5		スピノエース顆粒水和剤 デアナナSC	1:スピノサト 1:スピノネトラム	2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○地際を食害する。	○被害株の株元を掘り起こし幼虫を捕殺する。	発生前	1B 3A		ダイアジン粒剤5 フォース粒剤	1:ダイジン 1:テフアルリン	6kg/10a 4kg/10a	は種時又は定植時 は種前	1回 1回	普 劇	× ×	○全面土壌混和 ○全面土壌混和 合ピレ(注)(本冊P.15)
キスジノミハムシ	(発生の特徴) ○成虫は早春から初冬に見られ、年数回発生する。 ○夏期の高温少雨で多発しやすい。	○圃場内や周辺を除草する。	発生前	1B 3A 4A 4A		ダイアジン粒剤5 フォース粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤	1:ダイジン 1:テフアルリン 1:ジノアフラン 1:ジノアフラン	6kg/10a 4kg/10a 6kg/10a 6kg/10a	は種時 は種前 は種時 は種時	1回 1回 1回 1回	普 劇 普 普	× × △ △	○全面土壌混和 ○全面土壌混和 合ピレ(注)(本冊P.15) ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和
センチュウ類			発生初期	4A 4A 22B		アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アケセルフロアブル	1:ジノアフラン 1:ジノアフラン 1:メタアルジン	2,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ○	
土壌清害虫防除法の項(本冊P.301)参照													

病名		耕種的防除法		薬剤防除法									
病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水 害(注)	注意事項	
黒腐病	(発生の特徴) ○秋雨時や台風通過後に多発しやすいため、(防除上のポイント) ○食害は病原細菌の侵入口になるため、食害性害虫は早めに防除する。	発生初期		24+M1 24+M1	カスモンボルドー カッパーシン水和剤	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △		
黒斑病	(防除上のポイント) ○下葉から発生するため予防散布を徹底する。	発生初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	3回以内	普	×		
白斑病	(防除上のポイント) ○下葉から発生するため予防散布を徹底する。	発生初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	3回以内	普	×		
白さび病	(発生の特徴) ○冷涼で降雨が続くときに多発する。	発生初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	3回以内	普	×		
べと病	(発生の特徴) ○20～24℃が発病適温で、多湿条件下で発生が多くなる。また、肥料切れや草勢が低下した時に多発しやすい。	発生初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	3回以内	普	×		
根こぶ病	(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。休眠胞子は表土15cmまでに多い。 ○本圃の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。	発生前		29 29 36 36 21	フロンサイト粉剤 フロンサイト粉剤 ネビジン粉剤 ネビジン粉剤 オラクル顆粒水和剤	1:フロンサイト 1:フロンサイト 1:フロンサイト 1:フロンサイト 1:アミナルプロム	15～20kg/10a 30～40kg/10a 20kg/10a 20～30kg/10a 200～300g/10a	は種又は定植前 は種又は定植前 定植前 は種又は定植前 は種前又は定植前	1回 1回 1回 1回 2回以内	普 普 普 普 普	△※ △※ ○※ ○※ △※	○作葉土壌混和 ○全面土壌混和 ○作葉土壌混和 ○全面土壌混和 ○1000の水で希釈し全面散布後土壌混和 ○使用方法(注)(本冊P.300)	
アブラムシ類	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草する。 ○シレンバーホリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	時定植 時種	1B 1B		オルトラン粒剤 オルトラン粒剤	1:アゼフェート 1:アゼフェート	6kg/10a 6kg/10a	は種時 は種時	1回 1回	普 普	○ ○	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和	
アオムシ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春～初夏及び10～11月に被害が多い。 ○(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	発生初期		4A 4A 4A 28+4A	アルパリン粒剤 スタークル粒剤 ダントツ粒剤 ジュリアフロアアブル	1:ジノアラン 1:ジノアラン 1:カチアニン 1:クロアトリエアロール2:チア外キヤム	6kg/10a 6kg/10a 1～2g/株 200倍	は種時 は種時 定植時 育苗期後半～定植当日	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	△ △ △ △	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○植穴処理土壌混和 ○使用方法(注)(本冊P.300)	
アオシロ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春～初夏及び10～11月に被害が多い。 ○(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	発生初期		4A 3A 3A 14	モスビラン顆粒水溶液 アグロスリン水和剤 アグロスリン乳剤 ハズンSG水溶液	1:アゼミブライド 1:シベルトリ 1:シベルトリ 1:カルトップ	4,000倍 1,000倍 2,000倍 1,500倍	収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	1回 3回以内 2回以内 3回以内	劇 劇 劇 劇	△ × × ×	○合ピレ(注)(本冊P.15) ○合ピレ(注)(本冊P.15)	
アオシロ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春～初夏及び10～11月に被害が多い。 ○(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	発生初期		28+4A	ジュリアフロアアブル	1:クロアトリエアロール2:チア外キヤム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(本冊P.300)	
アオシロ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春～初夏及び10～11月に被害が多い。 ○(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	発生初期		6	アブアーム乳剤 ベリマーグSC グレイシア乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:エマクチン安息香酸塩 1:シアントラニプロール 1:フルキキマスト	1,000～2,000倍 4,000倍 3,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 1回 1回	普 普 普	△※ △ △	○0.20/m ² 株元灌注 ○0.20/m ² 株元灌注	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
コナガ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。(防除上のポイント) ○殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいため、同一系統の薬剤を連用しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分の実施、また、発生放任圃場を作らない。 	発生初期	5 6 14 15 28 un 30		<p>ディアノSC アファーム乳剤 バダンSG水溶剤 ノーモルト乳剤 ベリマークSC プレオフロアブル グレーシア乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照</p>	<p>1:スピネトラム 1:エマクチン安息香酸塩 1:カルタップ 1:テフアルブスロン 1:シアントラニリプロール 1:ピリダリル 1:フルキサメタスト</p>	<p>2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 1,500倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍 3,000倍</p>	<p>収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 1回 1回 2回以内 1回</p>	<p>2回以内 2回以内 3回以内 1回 1回 2回以内 1回</p>	<p>普 普 劇 普 普 普</p>	<p>△ △※ × △ △ △ △</p>	<p>○合ピレ(注)(本冊P.15) ○0.20/m²株元灌注</p>
ハスモンヨトウ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し処分する。 	発生初期	28+4A		ジェトロフロアブル	1:クロラントニアプロール2:チアホキサム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(本冊P.300)
ムシトウ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○年2回発生、5月、10月に被害が多い。 		発生初期	5 6 13 un 28		<p>ディアノSC アファーム乳剤 コテツフロアブル プレオフロアブル プレバシオンフロアブル5 BT剤(参考資料P.15)参照</p>	<p>1:スピネトラム 1:エマクチン安息香酸塩 1:クロルフェチル 1:ピリダリル 1:クロラントニアプロール</p>	<p>2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍</p>	<p>収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 2回以内 2回以内 3回以内</p>	<p>2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内</p>	<p>普 普 劇 普 普</p>	<p>△ △※ △※ △※ △※</p>	<p>○IGR剤(注)(本冊P.15)参照</p>
メハライイイイ ガマダラノ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○別名(ダイコンジクグイムシ) ○夏期の高温少雨で多発す ○7～10月に発生が多くなる。 ○幼虫は生長点付近を食害する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○被害を受けた収穫残さは発生源となるので適切に処分する。 	発生初期	6		アファーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
ハモグリバエ類			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェキサソロン	2,000～4,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
ハキムシ シジミ ノミ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○暖冬の後発生しやすいので、春先の成虫の発生に注意する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○アブラナ科野菜の連作を避ける。 ○周辺のアブラナ科雑草の除草を徹底する。 	発生初期	3A 4A		<p>フォース粒剤 モスヒラン顆粒水溶剤</p>	<p>1:テフアルリン 1:アゼキサプロド</p>	<p>4kg/10a 4,000倍</p>	<p>は種前 収穫14日前まで</p>	<p>1回 1回</p>	<p>劇 劇</p>	<p>× △</p>	<p>○全面土壌混和 合ピレ(注)(本冊P.15)</p>
シジミ ノミ		<ul style="list-style-type: none"> ○周辺の寄生植物を除去する。 ○必要以上に有機物を施用しない。 	発生前	1B		ダイアジン粒剤5	1:ダイジン	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○全面土壌混和
ネキリムシ類	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。(留意点) ○粒剤を使用した場合は間引菜を利用しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。 	発生前	1B 1B 3A		<p>ダイアジン粒剤5 ネカリエースK ガーベイトA</p>	<p>1:ダイジン 1:イキサチオン 1:ベルホルリン</p>	<p>6kg/10a 3kg/10a 3kg/10a</p>	<p>は種時 発芽期まで 生育初期</p>	<p>1回 1回 3回以内</p>	<p>普 普 普</p>	<p>× △ ○※</p>	<p>○全面土壌混和 ○土壌表面株元処理 ○株元散布 合ピレ(注)(本冊P.15)</p>
イハク ニサ ケラ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○休眠卵が土中などで越冬し、11～4月頃活動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○収穫残さや雑草に残された卵が次の発生源となるので、適切に処分する。 ○土壌の乾燥を図る。 ○未熟堆肥の施用を避ける。 	発生初期	5		ディアノSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
センチュウ類			発生前	1B		ダイアジン粒剤5	1:ダイジン	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○全面土壌混和

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
根こぶ病	<ul style="list-style-type: none"> ○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多発圃場での作付を避ける ○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。 	発生前	36	36	ネビジン粉剤 ネビジン粉剤 フロキサト粉剤 オラクブル顆粒水和剤	1:フルフェキサト 1:フルフェキサト 1:フルアジナム 1:アミダプロム	20～30kg/10a 20kg/10a 30kg/10a 200～300g/10a	は種又は定植前 は種又は定植前 は種前 は種前又は定植前	1回 1回 1回 2回以内	普 普 普 普	○※ ○※ △※ △※	○ 全面土壌混和 ○ 作条土壌混和 ○ 全面土壌混和 ○ 100%の水で希釈し全面散布後土壌混和
白さび病	<ul style="list-style-type: none"> ○ アブラナ科作物で発病する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 湿地を避け排水を良くする。 ○ 発病葉を除去し、適正に処理する。 ○ 窒素質肥料の偏用を避ける。 	は定植前又は発生初期	11+4		ユニフォーム粒剤	1:アゾキシストロビン2,2,7,7-テトラヒドロ	9kg/10a	は種前又は定植前	1回	普	△	○ 全面土壌混和
アブラムシ類	<ul style="list-style-type: none"> ○ モモアカアブラムシ、ニセダイコンアブラムシが発生する。 ○ モモアカアブラムシは春、ニセダイコンアブラムシは秋に発生が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ シルバーボールによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。 	発生初期	4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4C		モスピラン粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 ダント粒剤 アドマイヤーフロアブル モスピラン顆粒水溶液 アクトラ顆粒水溶液 ダントツ水溶液 アルビリン顆粒水溶液 スタークル顆粒水溶液 トランスフオームフロアブル	1:アセタミプリド 1:シ/ナアゲン 1:シ/ナアゲン 1:ケチアジソン 1:イタクロアクト 1:アセタミプリド 1:チアアトキム 1:ケチアジソン 1:シ/ナアゲン 1:シ/ナアゲン 1:スルホキサフロル	3kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 4,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍 3,000倍 2,000倍	は種時 は種時 は種時 は種時 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで	1回 1回 1回 1回 2回以内 1回 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 劇 劇 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ ○	○ 播溝土壌混和 ○ 播溝土壌混和 ○ 播溝土壌混和 ○ 播溝処理土壌混和
アオムシ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 標準名称(モンシロチョウ) ○ 春～初夏及び10～11月に被害が多い。 		発生初期	15 3A 6		カスケード乳剤 アデオン乳剤 アファーム乳剤 BT剤(参考資料P.15)参照	1:フルフェキサト 1:ベトルリン 1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ × △※	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
コナガ	<ul style="list-style-type: none"> ○ (発生の特徴) ○ 春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分、発生放任圃場を作らない。 	発生初期	4A 15 un 5 5 22B		モスピラン粒剤 カスケード乳剤 プレオフロアブル スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC アケルフロアブル BT剤(参考資料P.15)、生物農薬(参考資料P.20)参照	1:アセタミプリド 1:フルフェキサト 1:ベトルリン 1:スピノアクト 1:スピノララム 1:メタフルミジン	3kg/10a 2,000倍 1,000倍 5,000倍 2,500～5,000倍 1,000倍	は種時 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 2回以内 2回以内 1回 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ ○	○ 播溝土壌混和 ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
シヨトウ類	<ul style="list-style-type: none"> ○ (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。 		発生初期	18 6		マトリックフロアブル アファーム乳剤	1:クロロフェン 1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍 1,000～2,000倍	収穫14日前まで 収穫7日前まで	3回以内 3回以内	普 普	○ △※	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○ 登録はトウモロコシ

病害虫名		病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ノハ メイ イイ マダ ガラ	○被害を受けた収穫残渣は 発生源となるので適切に 処理する。	発生 初期	6	アファーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※				
エハ 類 グ リ バ		発生 初期	6	アファーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※				
マハモグリバエ		発生 初期	15	カスケード乳剤	1:フルフェキサソロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△			○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照	
アザ ミウ マ	○雑草にも寄生し発生源と なるので、圃場周辺を 除草する。	発生 初期	6	アファーム乳剤 生物農薬(参考資料P.20)参照	1:エマクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※				
ウセ 類 ン チ ユ		発生 前			土壌清毒虫防除法の項(本冊P.301)参照									
ネ キ リ ム シ 類	(発生の特徴) ○ 主要種はカブラヤガ ○ 地際を食害する。	発生 前	1B 3A	ダイアジン粒剤5 フォース粒剤	1:ダイアジン 1:テフルトリン	6kg/10a 4kg/10a	は種時又は定植時 は種前	1回 1回	普 劇	× ×			○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和 IGR剤(注)(本冊P.15)参照	
キ ス ジ ノ ミ ハ ム シ	(発生の特徴) ○ 成虫は5月から10月にかけて 数回発生する。 ○ 夏季が高湿少雨であると発生 が多い。 ○ 成虫で越冬する。	発生 前	1B 3A 4A 4A	ダイアジン粒剤5 フォース粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤	1:ダイアジン 1:テフルトリン 1:ジ/テフラン 1:ジ/テフラン	6kg/10a 4kg/10a 6kg/10a 6kg/10a	は種時又は定植時 は種前 は種時 は種時	1回 1回 1回 1回	普 劇 普 普	× × △ △			○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 播溝土壌混和 ○ 播溝土壌混和	
ム ヤ イ ソ ウ	(発生の特徴) ○ 食害痕は円形で、加害は10 月ごろから翌5月ごろまで見 られる。	発生 初期	4A 4A 4A 22B 3A	アルバリン顆粒水溶性 スタークル顆粒水溶性 モスビラン顆粒水溶性 アクセルフロアブル アデイオン乳剤	1:ジ/テフラン 1:ジ/テフラン 1:アセタミプリド 1:メタルジン 1:ヘルトリン	2,000倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍 3,000倍	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 1回 3回以内 3回以内	普 普 劇 普 普	△ △ △ △ ×			○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照	

病害虫名		耕種的防除法		IRAC	FRAC	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
時期	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法		コード	コード								
根こぶ病	(発生の特徴) ○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。	○多発圃場での作付を避ける。 ○石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。 ○前作でフルスルファミドを使用した圃場などではおとり植物の根毛感染が抑制されるため併用しない。 ○発病を避け排水を良くする。 ○発病薬を除去し、適正に処理する。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。		発生前	M5 21	ダコソイル オラクル顆粒水和剤	1:TPN 1:アミナルフロム	20～40kg/10a 150～300g/10a	は種前は種前	1回 2回以内	普 普	× △※	○作条施用土壌混和 ○1000の水で希釈し全面散布後土壌混和 ○全面土壌混和 ○全面土壌混和 ○作条土壌混和 ○全面土壌混和 ○全面土壌混和 ○全面土壌混和
白さび病	(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。	○圃場周辺の除草を徹底する。 ○発病作物の連作を避ける。 ○排水を良好にする。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。		前発 生	11+4	ユニフオーム粒剤	1:アゾキシストロビン2:タラキニルM	9kg/10a	は種前は種前	1回	普	△	○全面土壌混和
べと病	(発生の特徴) ○秋季や春季、低温多湿で発病する。	○圃場周辺の除草を徹底する。 ○発病作物の連作を避ける。 ○排水を良好にする。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。		初発 期生	11	アミスター-20フロアブル	1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
キスジノミハムシ	(発生の特徴) ○成虫は5月から10月にかけて数回発生する。 ○夏季が高温少雨であると発生が多い。 ○成虫で越冬する。	○圃場周辺の除草を徹底する。 ○発病作物の連作を避ける。 ○排水を良好にする。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。		発生前	4A 4A 3A	アルパリン粒剤 スタークル粒剤 フォオース粒剤	1:ジノアテラン 1:ジノアテラン 1:アセタムプリド 1:アセタムプリド 1:アセタムプリド 1:プロフェン 1:トルフェンビト	6kg/10a 6kg/10a 4kg/10a	は種時は種時 は種時は種時 は種時は種時	1回 1回 1回	普 普 劇	△ △ ×	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○は種時・作条散布 ○作物生育中:株元散布
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○土壌施用剤は残効性が長くウイユス病防除により。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草する。 ○シルバーポリによる敵マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。		発生前	4A 4A 4A	アルパリン粒剤 スタークル粒剤 ダントツ粒剤	1:ジノアテラン 1:ジノアテラン 1:クロチロニン	6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a	は種時は種時 は種時は種時 は種時は種時	1回 1回 1回	普 普 普	△ △ △	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝処理土壌混和 ○株元散布 ○株元散布
アオムシ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春～初夏及び10～11月に被害が多い。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草する。 ○シルバーポリによる敵マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。		発生前	4A 4A 4A	アルパリン粒剤 スタークル粒剤 ダントツ粒剤	1:アセチアクト 1:アセチアクト 1:アセタムプリド 1:アセタムプリド 1:プロフェン 1:トルフェンビト	4kg/10a 4kg/10a 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍	収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫21日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで	1回 1回 1回 1回 1回 1回	普 普 劇 普 普 劇	○ ○ △ △ △ △ ×	○株元散布 ○株元散布 ○かぶれ・目の刺激注意
コナガ	(発生の特徴) ○春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。	○圃場周辺の除草を徹底する。 ○発病作物の連作を避ける。 ○排水を良好にする。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。		発生前	5 30	デアナナSC プロフレアSC BT剤(参考資料P.15)参照	1:スピネトラム 1:プロフレアニト	2,500～5,000倍 2,000～4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	普 普	△ △	○かぶれ・目の刺激注意

病害虫名		耕種的防除法		薬剤防除法									
病害虫名	病害虫の特徴 防除法のポイント等	時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項	
メハ イイ ガマ ダ ラ ノ	<p>(発生の特徴)</p> <p>○別名:ダイコンジクイムシ。 ○7月～10月に発生が多くなる。 ○高温少雨で多発する。 ○幼苗期に生長点付近を食害</p>	発 生 初 期	21A 28 30	39	ハチハチ乳剤 フェニックス顆粒水和剤 プロレアSC BT剤(参考資料P.15)参照	1:トリフェニレト 1:フルベンシアミド 1:プロフラエニト	2,000倍 2,000～4,000倍 2,000～4,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 2回以内 3回以内	劇 普 普	× △ △	○かぶれ・目の刺激注意	
チカ ブ ラ ハ バ	<p>(発生の特徴)</p> <p>○風通しが悪かったり、茂りす ぎのところで多発する。</p>	発 生 初 期	1B		マラン乳剤	1:マラン	1,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△		
エハ 類 グ リ バ	<p>(発生の特徴)</p> <p>○4～11月に発生し、蛹や成虫 で越冬する。</p>	発 生 初 期	5		スピ/エース顆粒水和剤	1:スピ/パド	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
サモグリバ		発 生 初 期	21A	39	ハチハチ乳剤	1:トリフェニレト	2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×	○かぶれ・目の刺激注意	

農薬の適正使用と危害防止について

- 農薬は、ラベルに表示されている記載事項を十分に確認し、適正に使用しましょう。
- 農薬散布後は、防除器具を十分に洗浄しましょう。
- 農薬を悪用されないように、毒物及び劇物の販売・保管管理に注意しましょう。
- ラベルに農薬登録番号がないにもかかわらず、農薬の効果を謳った資材や、使用すると病虫害に効果がある資材は、無登録農薬の疑いがあるので注意しましょう。
- 農薬飛散の懸念のある場合は、被覆などの防護対策、周辺にも登録のある農薬の選定、飛散の少ない粒剤への切り替え等の対策を実施しましょう。
- 特に住宅地周辺での農薬使用は注意をはらい、事前通知の実施等、周辺住民に対して十分配慮しましょう。

農林水産省：住宅地等における農薬使用について

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/

本指針に掲載した農薬は、原則として「令和5年12月6日現在」の農薬登録に基づいて作成しました。

実際の指導に当たっては登録内容が変更されている場合がありますので、必ず下記のHP等で常に最新の情報を確認してください。

また、農薬使用者に対しては、農薬を実際に使用する際には、**農薬ラベル**の表示事項（使用方法、注意事項等）を確認し、遵守するよう指導してください。



○農林水産省ホームページ

「農薬登録情報提供システム」最新の農薬登録情報

(<https://pesticide.maff.go.jp/>)

○農林水産省ホームページ「農薬コーナー」

(<https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html>)

○愛媛県農産園芸課ホームページ「愛媛県農業技術情報サービス」

「農薬の適正使用について」

県内における農薬の適正使用への取り組み等

(<https://www.pref.ehime.jp/page/11438.html>)

愛媛県 農薬適正使用

検索

○病害虫防除所ホームページ

病害虫発生子察情報等

(<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/>)

愛媛県病害虫防除所

検索